

南京陥落七十五周年

南京戦は  
あつたが  
「南京虐殺」は  
なかつた

南京の真実国民運動



東京裁判で刷り込まれた「南京虐殺」は、日本人長年に亘って苦しめてきた。それが、中国と欧米連携したウソの政治プロパガンダだと判った今は世界に向けて「南京虐殺」の真実を訴えよう。

南京戦を戦った勇敢なる日本軍将兵に捧げる。

はしがき……………1

第一部「南京虐殺」とは何か 導入編……………2

- 2 パネル展「南京虐殺」を知っていますか……………2
- 3 貴方は、「南京虐殺」を知っていますか……………3
- 4 「南京事件」河村名古屋市長の勇氣ある発言……………4
- 5 「南京虐殺」がなかったことを証明する常識的な事実……………5
- 6 当時の新聞報道に見る陥落後の南京……………6

第二部 南京攻略戦までの経緯……………7

- 7 南京事件歴史年表・盧溝橋事件から東京裁判まで……………7
- 8 何故、日本軍は中国大陸にいたのか……………8
- 9 何故、日本軍は中国と戦ったのか……………9
- 10 日中戦争は合法的で侵略ではなかった……………10
- 11 日中間の戦いを諸外国はどのように見ていたか……………11
- 12 日本軍は南京攻略戦をどのように戦ったのか(1)……………12
- 13 日本軍は南京攻略戦をどのように戦ったのか(2)……………13
- 14 南京戦を戦った元日本兵達の証言……………14
- 15 南京占領後の日本軍による治安回復……………15

第三部「南京虐殺」は本当にあったのか・戦前編……………16

- 16 南京城内に設けられた安全区とは何か……………16
- 17 南京城内と安全区で「虐殺」はあったのか……………17
- 18 南京城内と安全区で「虐殺」がなかった証拠……………18
- 19 国際法に則った敵兵処刑は虐殺ではない……………19
- 20 「南京虐殺」は本当にあったのか?世界を騙した捏造写真の検証(1)……………20
- 21 「南京虐殺」は本当にあったのか?世界を騙した捏造写真の検証(2)……………21
- 22 「南京虐殺」は本当にあったのか?世界を騙した捏造写真の検証(3)……………22
- 23 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(1)「国民党国際宣伝処」……………23
- 24 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(2)「ペイツメモと米国新聞」……………24

- 25 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(3)「ティンパーリ」……………25
- 26 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(4)「ペイツと国際委員会」……………26
- 27 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(5)「スマイス」……………27
- 28 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(6)「ウィッチ」……………28
- 29 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(7)「マギー」……………29

第四部「南京虐殺」は南京裁判・東京裁判で捏造された・戦後編……………30

- 30 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(8)「国民党と南京裁判」……………30
- 31 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(9)「米国と東京裁判」……………31
- 32 埋葬四万人が虐殺四万人と捏造された……………32
- 33 「百人斬り競争」は本当にあったのか?……………33
- 34 「南京虐殺」を武器に日本侵略を謀る中国の野望……………34
- 35 中国胡錦濤主席への公開質問状……………35
- 36 中国胡錦濤主席への公開質問状(中文)……………36
- 37 広辞苑に見る「南京事件」記述の大変貌……………37
- 38 驚愕!外務省が支援する中国の「南京虐殺」研究……………38
- 39 奇つ怪な裁判! 中国で判決、日本で執行?……………39
- 40 日本を貶める「南京虐殺」肯定派の日本人……………40
- 41 「南京虐殺」の嘘を暴いた日本人研究者たち……………41

第五部 日本の未来への提案……………42

- 42 自由社教科書の「南京事件否定」を覆した文科省検定……………42
- 43 政府は「近隣諸国条項」を棄し、「南京虐殺」を否定せよ!……………43
- 44 「南京虐殺」の汚名を晴らさないと日本の未来はない!……………44

第六部 南京事件小論文……………45

- 45 新情報が次々に暴く南京虐殺のウソ(茂木弘道)……………45
- 48 捏造された「南京大虐殺」(加藤浩康)……………48
- 51 「百人斬り競争」を肯定し続ける朝日新聞(溝口郁夫)……………51
- 53 支那事変に至るまでの近代の日中関係史(石部勝彦)……………53

はしがき

平成二十四年（二〇一二年）二月、河村たかし名古屋市長は、姉妹都市である南京市との交流のなかで、日中両国関係にささったトゲともいうべき歴史認識に言及し、南京で日中間の戦闘はあったがいわゆる「南京事件」なるものはなかったのではないかと思うとの私見を述べ、この問題について討論をしたいと呼びかけました。

ところが、南京市は名古屋との姉妹都市交流を中断するとし、中国共産党は「必ず代償を払うことになる」（人民日報）と報復措置を示唆しました。日本国内にも、河村発言の撤回を求めるなどの動きがありました。

しかし、南京事件がなかったことは、「日本『南京』学会」を中心とした過去十数年間の実証的研究によつて明らかになつてきたことです。まして、河村市長の発言は私見を押しつけたわけではなく、相互の討論を呼びかけたものです。それを封殺することは、自由な歴史研究と言論の自由を奪うものです。

そこで、教科書問題を通してこの問題の解明に取り組んできた「新しい歴史教科書をつくる会」は、河村発言を支持する緊急集会を呼びかけ、その集会を機縁に、同憂の団体が結集して「南京の真実国民運動」なる運動団体が結成され、渡部昇一氏が代表に就任しました。国民運動は、安倍晋三氏、石原慎太郎氏らを呼びかけ人とする意見広告を八月と九月の二回にわたつて全国紙に掲載し、署名運動を進め、研究集会を各地で開催するなど、活発な運動を展開してきました。「南京陥落七十五周年」となる十二月十三日には、平成二十四年の締めくくりとして『「南京事件」の真相に迫る国民集会』を開催しました。

この小冊子は、その集会で初めてお披露目された新作のパネルをそのまま印刷したものです。一口に「南京事件」と言つても、関連するテーマは広く、数々の嘘が分厚く堆積してきました。真相を伝えるのは簡単なことではありません。この小冊子は、その困難な課題に挑戦した労作で、最新の研究成果に立ちながら事件の「真相」が分かりやすくまとめられていきます。パネルが各地で展示され、この小冊子が普及することを監修者として期待しております。

なお、パネルと小冊子の作成は、「南京の真実国民運動」が発案・企画し、「新しい歴史教科書をつくる会」に構成・制作を委嘱したものであることを付け加えておきます。

平成二十四年十二月

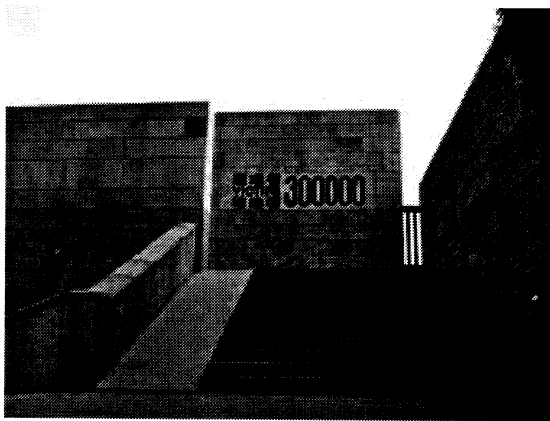
監修者 藤岡 信勝



パネル展「南京戦はあったが南京虐殺はなかった」開催にあたって



南京占領後、子供達と遊ぶ日本兵



嘘で固めた反日の殿堂「南京大屠殺記念館」

中国による尖閣諸島と琉球の領有宣言などのあからさまな日本に対する挑発は、日中戦争で日本の侵略から中国を守ったのは中国共産党だったという歴史を捏造し、日本を中国の敵とする事で、共産党一党独裁の正当性を維持するための戦略なのです。中国人も、徹底した反日教育を施された結果、日本に対しては愛国のためなら何をしても許されるという「愛国無罪」の行動を正当化し、日中国交正常化四十周年というのに、デモ隊は官憲監視の下で日本企業を襲い、略奪破壊を繰り返したのです。

中国政府が反日運動を広める過程で最も効果的だったのは「南京虐殺三十万人」の大嘘でした。全国三百カ所に造られた抗日戦争記念館や「南京大屠殺記念館」は反日の象徴であり、子供達の教育の場となっています。中国では日中戦争や「南京虐殺」が決して過去の歴史問題ではなく、日中友好の虚言の裏で進められている、中国の対日領土・歴史侵略の政策遂行の根拠であり、日本国内でこれに呼応する反日日本人の存在は、中国の戦略を正当化し、日本に多大の危機をもたらしているのです。

一方、敗戦後の無法な東京裁判とその後七年間のアメリカによる巧妙な精神侵略を狙った統治の結果、正当な戦争であった日中戦争は、南京虐殺を伴う侵略戦争とされ、日本人は残虐な侵略国家の国民という汚名を背負わされてきました。それ故に中国の横暴に対しても口を閉ざしてきた結果が、今日の危機を迎えることになったのです。

幸いにして、規律正しい日本軍兵士として日中戦争を戦った父祖の行動を信じる人達の献身的な努力により、今では「南京虐殺」が日本を貶める中国や欧米の宣教師・新聞記者達の大嘘であり、日本を貶めるための政治的プロパガンダであったことを完膚なきまでに証明することができ、日本民族に着せられた汚名を雪ぐことができました。

このパネル展をご覧いただき、「南京戦はあったが南京虐殺はなかった」こと、日中戦争が侵略戦争ではなかったこと、そして日本の生存を掛けて雄々しく戦った日本軍兵士のことなどをご理解いただき、我が国に対する誇りを取り戻し、狡猾な外交で領土・歴史侵略を謀る中国に警戒心を抱いて戴きたいと願うのです。

皆さんは「南京事件」、「南京虐殺」或いは「南京大虐殺」と呼ばれる事件について何か知っていることがありますか？  
以下の中からご自分のイメージに合う答えを選び、その番号を書いて投票して下さい。

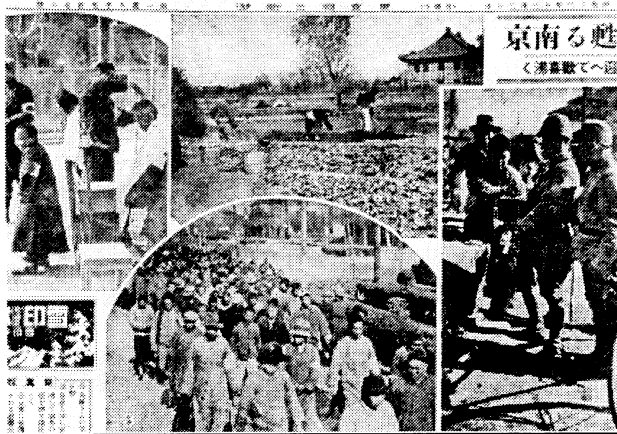
あなたは「南京虐殺」を知っていますか

知識は汚名を晴らす一歩

- 1 このことについては何も知らない。
- 2 ”虐殺”など実際はなかった。「南京虐殺」は中国の政治的プロパガンダであって、実際に日本軍による虐殺と証明されたものは何もない。
- 3 ”虐殺”はあった。あったとしても犠牲者は多くてもせいぜい4万人ぐらい、或いはそれ以下ではないのか。
- 4 ”虐殺”はあった。東京裁判等で判定された10万人から20万人程度ではないか。
- 5 ”虐殺”はあった。被害を受けた当事者の中国が、軍民合わせて犠牲者が30万人というのだから、本当だと思う。
- 6 ”虐殺”はあった。被害者は婦女子を含む一般の市民だけで30万人以上であり、それ以外に軍人の被害者もいるだろう。
- 7 ”虐殺”はあった。”虐殺”は南京市内だけで起こったのではなく、日本軍が上海から南京へ追撃する間でも起こったのであり、その犠牲者は軍人が30万人、民間人も30万人が犠牲になったのではないか。
- 8 ”虐殺”はあった。残虐な日本軍と言われているのだから、何をやっても不思議ではない。中国側には、虐殺された数100万人という説もある。

投票は下の投票箱へ





南京陥落5日目の朝日新聞の写真  
 (右) 武器も持たずに買い物をする日本兵  
 (中上) 南京に戻り畑を耕す農民  
 (中下) 平和になって南京に戻る中国人ら  
 (左) 中華街の名物である街頭床屋  
 子供も大人も手製の日の丸の腕章をして笑っている。



南京陥落後2日目の写真  
 「中国人は日本人カメラマンが行くと、積極的に子供をかかえて撮影に協力してくれる。日本兵や日本人を恐れていなかった」(カメラマン世隆庵寿氏。南京占領の2日後 1937.12.15撮影 南京安全区にて)



近藤平太夫氏印鑑

# 「南京虐殺」がなかった事を証明する常識的な事実

※昭和十二年十二月十三日、南京が陥落し、日本軍の一部の部隊が城内に入ったが、新聞記者、カメラマンなど百五十人もその後を追って入城した。次々に送られてくる記事、写真は「平和甦る南京」だった。虐殺を見たなどという記者は戦後になっても一人もいなかった。

※南京にいた外国人によって「安全区」が作られ、全住民はそこに收容された。安全区国際委員会の記録 (Documents of the Nanking Safety Zone) によると、陥落時の人口は二十万人、十二月中も二十万人、翌年の一月十三日には二十五万人に増えている。虐殺されたという三十万人はどこに居たのか。

※入城した兵士の日記には、南京市内は森閑として人っ子一人見えず怖かったと書いている。逃亡した住民以外は安全区に避難していたからだ。陥落二日後には安全区に路店が開かれ、ある兵士はそこで記念に印鑑を作ってもらったと言う(写真参照)

※中国共産党の大御所だった毛沢東主席は、生涯一度も「南京虐殺」に言及していない。南京戦の五ヶ月後、延安で「持久戦論」の講義をした時、南京戦に触れ、「日本軍は包囲は多いが殲滅が少ない」という批判をした。これは「殲滅しみなごろし」を日本軍はしないという批判である。

※敵であった国民党政府の「国際宣伝処」は、外国人の記者三五名ほどを集め、殆ど毎日、南京戦を挟むほぼ一年間に、お茶会と称する記者会見を三百回開き、日本軍の暴虐を宣伝したが、只の一度も「南京虐殺」に触れたことは無かった。もし、本当に「南京虐殺」が有ったとしたら、こんな事が考えられるだろうか。

※日本軍に依る「虐殺」の証拠と言われる写真を全て精査したところ、証拠立てる写真は一枚も無かった。全てが合成写真か、全く関係の無い写真や、中には日本のアサヒグラフが撮った写真をそのまま説明書きを変えて利用したものもあった。全てが捏造写真だったのだ。

# 当時の新聞報道に見る陥落後の南京

穏やかな風景が語る真実とは

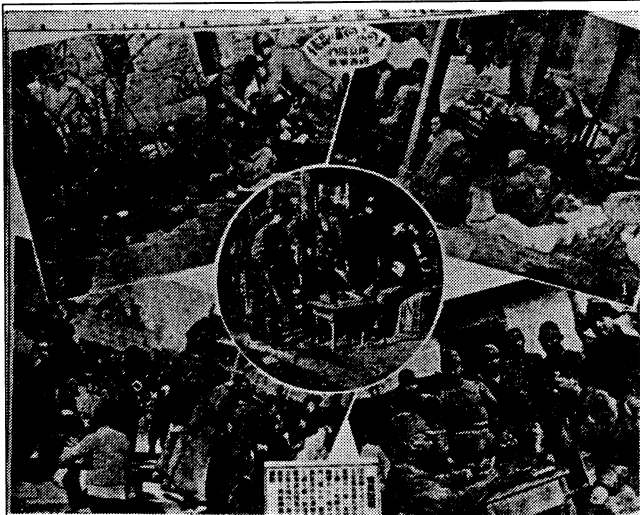
(右上) 治療を受ける中国傷病兵

(左上) 日本軍将兵の情で食欲を満たす投降兵

(中央) 中国人の店で買い物する日本兵達

(右下) 山田部隊長と語る敵の教導総隊参謀 沈博施少佐

(左下) 南京城内でくつろぐ中国人市民達



南京占領後8日目の朝日新聞 「きのうの敵に温情」



12月17日 日本軍歓迎の万歳をする中国人



12月14日 防空壕から出る女性を保護



12月18日 食糧配る日本兵

日本軍が虐殺、略奪、強姦をほし、いまにしていたとしたら、中国人市民達のこの明るい笑顔は一体何なのか？  
肯定派はこの矛盾を説明して欲しい。



12月27日 中国人に紙幣を渡す日本兵



12月20日 子供達と遊ぶ日本兵



12月20日 日本兵から菓子をもらい喜ぶ家族

1937 (昭和12)年

- 7月 7日：盧溝橋事件→中国軍の発砲で発生→支那事変（日中戦争）の開始
- 7月 29日：通州事件→日本人居留民260人が虐殺される
- 8月 4日：日本政府の融和策→「船津和平工作」（日本は満州事変以後の權益放棄）
- 8月 9日：大山事件→大山中尉 上海で機関銃で虐殺される→和平工作中止
- 8月 13日：上海で中国便衣隊が日本警備兵に発砲、夕方中国軍砲撃開始、日本軍反撃
- 8月 14日：中国爆撃機が上海の日本租界、仏租界爆撃→729人死亡 避難所爆撃され1021人死亡→日本軍応戦で第2次上海事件勃発→日中全面衝突となる
- 11月 5日：日本はドイツに和平仲介を依頼→蒋介石拒絶
- 11月 7日：中支那方面軍編成→司令官松井石根大将
- 11月 11日：蒋介石が南京死守を決定、唐生智が南京防衛軍司令官に就任
- 11月 12日：上海陥落
- 11月 16日：南京国民政府が重慶へ遷都
- 11月 19日：南京在住の欧米人15人が国際委員会結成→委員長はジョン・ラーベ
- 11月 22日：国際委員会が一般市民避難のために「安全地帯」の設定を公表
- 11月 23日：国民党政府の記者会見が始まる→終戦まで300回（南京虐殺の話題なし）
- 11月 28日：国民党政府が南京の人口20万と発表
- 12月 4日：日本軍南京郊外まで進軍
- 12月 7日：蒋介石が飛行機で逃亡、午後一時、日本軍南京市への攻撃開始
- 12月 9日：松井石根司令官が降伏とオープンシティ勧告発する→中国軍反応なし
- 12月 10日：中国軍の降伏勧告区無視を確認し、午後一時、日本軍が総攻撃開始
- 12月 12日：中国軍唐生智南京防衛軍司令官が退却命令発し自身はいち早く逃亡
- 12月 13日：南京陥落、掃討戦 ※東京日日新聞（毎日新聞）が百人斬りを報道
- 12月 17日：日本陸海軍の入城式 ※朝日新聞従軍記者9名の紙上座談会報道
- 12月 18日：ロンドンタイムズ（14日）南京に死体散在するが女性死体なしと報道
- 12月 15日：シカゴデイリーニュースのスティールが日本軍に依る虐殺の様子を報道
- 12月 18日：ニューヨークタイムズのダーディン記者がスティール記者と同様の報道
- 12月 21日：朝日新聞が戦後の南京の平和な風景を報道
- 12月 24日：日本軍が安全地帯に潜む中国兵を探し出す為に兵民分離に着手

1938 (昭和13年)

- 1月 22日：ノースチャイナデイリーニュースが不法殺害者数1万人と報道
- 2月 2日：第百会期国際連盟理事会で顧維均中国代表が南京で2万人虐殺と数千の女性への暴行があったと演説→連盟の行動を要求するが採択されず
- 3月 19日：チャイナフォーラムが8万人不法殺害と報道
- 6月 8日：ジョン・ラーベが中国側の申し立てによると10万人の民間人が殺されたそうだが、我々外国人は5万から6万と見ている、とヒトラーに報告
- 7月 : ハロルド・ティンパリーの『戦争とは何か/中国における日本軍の暴虐』発刊→華中の戦闘だけで中国人の死傷者は少なくとも30万人を数えほぼ同数の民間人の死傷者が発生と記述  
ベイツが『戦争とは何か』にメモランダムを提供→埋葬証拠は非武装の4万人近い人間が城内や城壁の近くで殺されたことを示しており、その内の約3割は決して兵士ではなかったと記述→『ベイツ・メモランダム』

1945年 (昭和20年)

- 8月 15日：大東亜戦争終結
- 12月 8日：朝日新聞が南京事件の被害者を2万人と報道

1946年 (昭和21年)

- 2月 : 「南京地方法院検察処敵人罪行調査報告」で被害者確数34万人と記述
- 5月 3日：東京裁判開廷
- 9月 : ・ 罪行調査委員会で被害者数391,785人と報告  
・ ベイツが不法殺害4万2千人のうち1万2千人が民間人、残りの3万人は捕虜殺害と証言  
・ 何応欽軍政部長が各年別死傷者統計を東京裁判に提出  
1937年戦死者124,130人 負傷者243,222人

1947年 (昭和22年)

- ： 谷寿夫第六師団長に対する中国軍事法廷判決は、集団殺害19万人以上 個別的殺害15万人以上 計30余万人と断定 谷寿夫師団長処刑される

1948年 (昭和23年)

- 1月 28日：百人斬り報道で向井・野田両少尉が南京軍事法廷で死刑判決 銃殺刑
- 11月 : 松井石根大将に死刑判決→個人として十万人の虐殺、司令官として二十万人の虐殺の罪に問われる
- 12月 3日：松井石根大将が絞首刑に処される

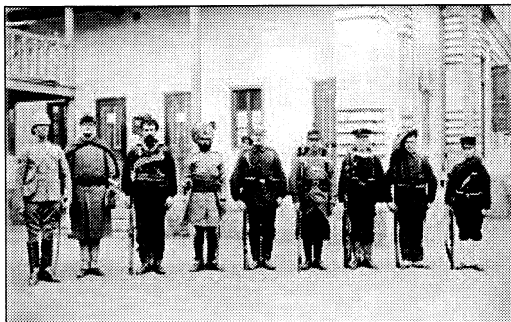




義和団



全軍を率いた  
柴五郎中佐



義和団と戦った8カ国連合軍（印度以外）  
右端が日本兵、日本軍が虐殺から救った

# なぜ日本軍は中国大陸にいたのか

それを侵略と言う偽善者達へ

## 清帝国末期の義和団事件

中国では、匪賊または匪賊まがいの武装集団が各地に盤踞して、外人を襲撃して金品を強奪し、生命を奪う事件が頻発していた。一九〇〇年の義和団事件（拳匪の乱）が有名である。この時は日本を含む八カ国が居留民の保護のため共同出兵して鎮圧した。その結果北京議定書（辛丑条約）によって、各国は居留民保護のため軍隊を駐屯させた。中国に軍隊を置いていたのは日本だけではなかった。

## 中華民国の軍隊の実態

中国では正規の軍隊と匪賊との間に殆んど違いはなかった。匪賊が突然正規の軍隊として認められる逆もあつた。張作霖が団長として九二年はもとめられ、首領であつた。中々民衆の時作霖が暴徒が集団で停め、臨城（山東省）事件が起きた。強奪の被害に遭っている。乗って来た欧米人二十名が強奪の被害に遭っている。一人殺害。

## 一九二七年の南京事件

この年、もう一つの南京事件が起きている。北伐途上の国民党軍が南京に入つた時、兵士達が外国人居留地を襲撃して略奪の限りを尽くし、死者を出した。日本は無抵抗を貫き、死者は出なかつたが、大使館に避難した日本人は略奪をほし、死者は出なかつたが、女性三十人全員が裸にされた。宝石を隠していないかと陰部をまさぐられたのである。

## 通州事件

盧溝橋事件の直後、それに忙殺された日本軍の隙をついて、北京近郊の通州で二六〇人の日本人居留民が殺害された。地方軍に襲撃され、その被害の様式である。有様は、文章にするのが難しい。特に女性文化

このように中国に居留する外国人は、常に危険にさらされていた。そこで、先の「議定書」に基づき、各国は居留民保護のための軍隊を駐屯させていたのである。

各国の駐屯兵力の比較と兵士一人当たり居留民数

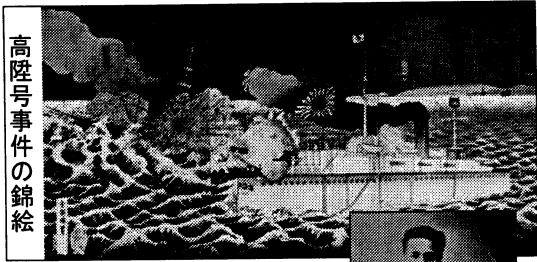
|      | 駐屯兵力   | 華北居留民数  | 居留民÷兵力 |
|------|--------|---------|--------|
| 日本   | 5, 600 | 33, 019 | 5.9    |
| イギリス | 1, 008 | 3, 000  | 2.98   |
| アメリカ | 1, 227 | 2, 500  | 2.04   |
| フランス | 1, 823 | 600     | 0.33   |



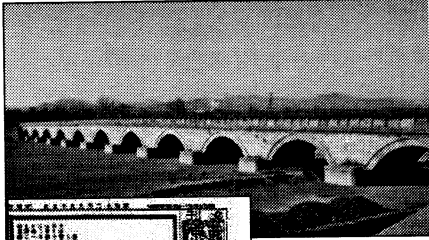


# 日中戦争は合法的で侵略ではなかった

## 戦争は外交の延長である



高陞号事件の錦絵



盧溝橋一発の銃声が日中戦争の引き金に

1937年8月30日  
ニューヨーク・タイムズ

日本軍は敵の挑発の下で最大限に抑制した態度を示した・・・但しそれによって日本人の生命と財産を幾分危険にさらしたが



上海の日本海軍陸戦隊



東郷平八郎

**海軍重大決意聲明**  
我が艦艇つひに空し  
斷乎有効手段に出づ

8月15日の朝日新聞

戦時国際法といえ、日清戦争の開始に先立ち巡洋艦「浪速」艦長の東郷平八郎の下した決断が有名である。日清戦争の開始直前に「高陞号」事件が起こった。日本が宣戦布告をした八月一日以前の七月二五日、英国商船「高陞号」が、朝鮮の仁川に清国兵一〇〇名を輸送中であつたのを「浪速」が発見した。停戦させ臨検し艦に随行を命じる。しかし船長は承諾したが清国兵に脅迫され実行できない。東郷は船長に「艦を見捨てよ、短艇を出す」と通告し、砲撃命令を出す。「高陞号」は撃沈された。

英国船籍の商船が撃沈された英国では日本に対する反発が起こる。しかし、国際法学者トーマス・ホーランド・アスキンとジョン・ウエレスキーはそれぞれタイムズに寄稿して国際法上日本側に違法行為がないと主張した。

「高陞号」が沈没したのは戦争が開始された後である。戦争はあらかじめ宣言せず始めても、少しも違法ではない。これは英米の法廷で幾度も審理され確定している。戦争が始まったのであれば交戦国の艦艇は公海上ならあらゆる船を臨検し交戦国の船、第三国の船でも相手国向けの戦時禁制品が積んであればこれを没収、あるいは破壊・処分し、必要なら撃沈するというのは艦長に認められる権利だからである。

これで英国世論も収まった。東郷は国際法に基づき断固たる行動を執つたのである。

日中戦争では、日本は国際法を軽視していたと言う人がいるが、それは事実と違う。「北京議定書」に基づき合法的に駐屯していた日本軍が、律義に演習時間、場所の事前通告をしたうえで盧溝橋河川敷で演習をした。終了直前午後十時四十分、後方から数発の銃弾が撃ち込まれた。その後再三発砲があり、七時間後の翌朝五時半、日本軍は反撃を開始した。国際法遵守の反撃であつた。(盧溝橋事件)

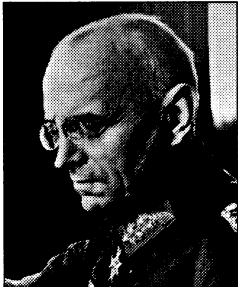
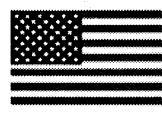
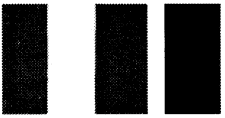
上海事件は第一次上海事変のあと結ばれた協定を破って一方的に中国正規軍三万が日本人居留区を守る海軍陸戦隊四千に全面攻撃をかけてきたことから始まった。協定破りの完全な国際法違反である。これは反日的だったニューヨークタイムスが明確に報道しているとおりでである。(一九三七年八月三十日号)

南京で日本軍は国際法を無視していたかのようなことを言うのは事実を知らない人である。中シナ方面軍司令部には齋藤良衛法学博士が国際法顧問として加わり、松井石根司令官は事あるごとに博士と協議していたのである。

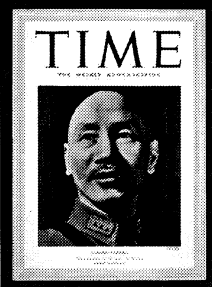
軍服を脱ぎ捨てて安全区に逃げ込んだ違法な中国兵を処刑したことは、戦時国際法に基づいた正当な行為であつた。

日中間の戦いを諸外国はどのように見ていたか

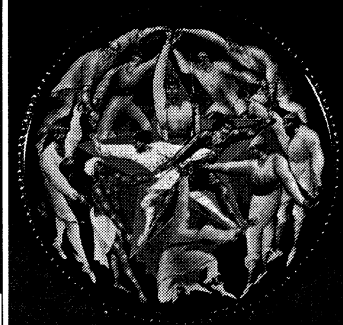
四面楚歌の日本



ドイツ軍のファルケンファウゼン将軍上海に強力な陣地を構築、だが日本軍の猛攻に崩壊した。



戦時中、アメリカの『タイム』誌の表紙を飾った蒋介石と宋美齢夫妻。1937年度の『パーソン・オブ・ザ・イヤー』に選出し、親中、反日を煽った。



ソ連が世界の共産化を企むコミンテルンの象徴的図柄第7回大会は日本の共産化を決議し中国を支援した

● 提す 蔣介石の石井 議対の全 会九致一 月府二に 十よる、 決日、日 本。際 連上 盟海は 中 国を 闘を 支持し 侵 略「日 本を 非難

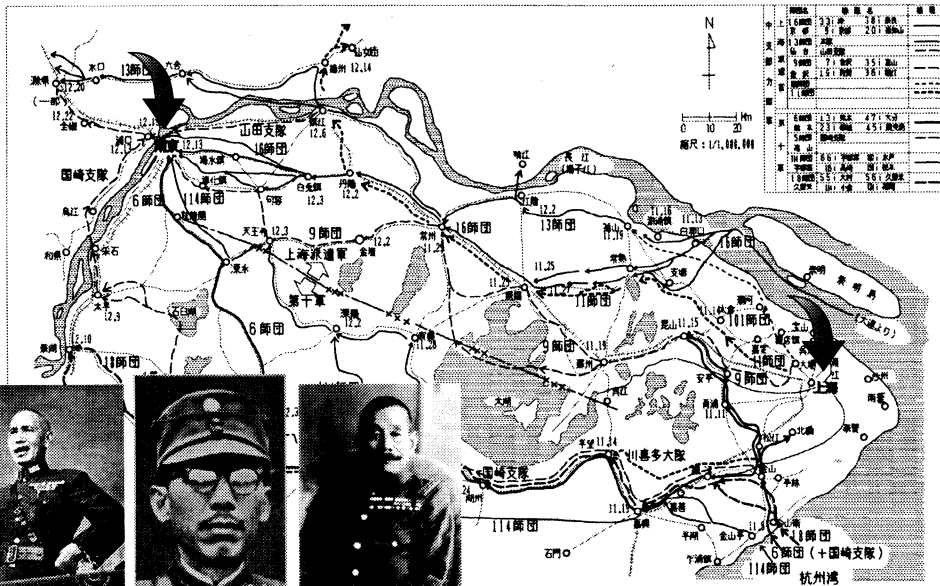
● イギリス・フランス・イタリア 表を向 支はし 援中 立な が いた。 伊タリ アは 中 国から 海軍の 援訓 練ル 中 国を 支 援や 武器 表を 向 支 援 中 立な 表を 向 支 援 中 立な

● ドイツ 裏切つて 六十年 には 日独 防共 協定を 結んで おきな がら さん 背 裏は シ 切つて 六十年 には 日独 防共 協定を 結んで おきな がら さん 背 裏は シ 切つて 六十年 には 日独 防共 協定を 結んで おきな がら さん 背

● アメリカ 断対を 行はし 和つて 交る 度 争得の 長期 化し、 望と さん 日 本を 指し 離し 出た

● ソ連 起さす 共産 主義を 大に 援助し 戦に 引く 共産 主義を 大に 援助し 戦に 引く 共産 主義を 大に 援助し 戦に 引く

主要師団の南京進撃



蒋介石1937年 唐生智司令官 松井石根大将

日本軍は南京攻略戦をどのように戦ったのか (1)

わは華仕南京  
 な門掛京  
 けのけ城  
 幕にのの  
 ば府は、  
 なら山武  
 な定二  
 かつ山十  
 の金山、  
 の西水、  
 の花門、  
 の台城、  
 の等門、  
 の要東、  
 の立中、  
 のこ日、  
 の城南、  
 の敵内、  
 の軍敵、  
 の同軍、  
 の時に、  
 の戦中

で長ため敵松  
 あし。さ軍井  
 ても回せか  
 。回期飛の官  
 答限行砲は  
 はは機撃、  
 な二飛激、  
 かつ十ばし、  
 間、我開  
 。城が軍を  
 。二にに、  
 十日十唐、  
 午後正司令  
 一、宛た、  
 全、降全  
 軍、し伏軍  
 総、か告、  
 攻、を、  
 撃、命、  
 を、時、  
 命、延

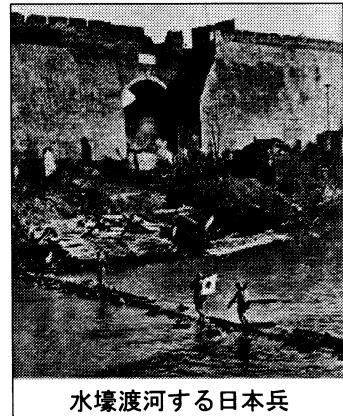
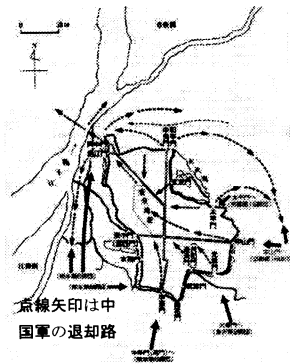
て砲たの南日  
 い台南防京本  
 が京衛軍が  
 。あ城軍脱が  
 つの外二し  
 。側、万漢口  
 。それ北、  
 。強幕場、  
 固府の、  
 な陣砲、  
 地台市、  
 を民南、  
 構東抱、  
 築し、は、  
 。日紫ま、  
 本金山、  
 軍砲護、  
 を台、  
 迎撃、  
 せん、  
 と待、  
 ち雨、  
 ち花、  
 え台、

国衆跡当上根をにし  
 史をとる海大将落陣  
 にを虐たか將と地、  
 長殺つ。ら司さを、  
 いして日本南京司な、  
 歴史食した軍京官、  
 を糧、は軍まの令、  
 奪、橋、これ、  
 全、ほ、ほ、  
 破、九、  
 壊、日、  
 され、踏、  
 居、破、  
 施、破、  
 設、破、  
 を、破、  
 壊、焼、  
 尽、  
 く、  
 す、  
 とい、  
 う、  
 焼、  
 け、

中国軍が世界に  
 上海事変で、  
 多くなると、  
 露戦死傷者、  
 戦争に出た、  
 旅順の戦い、  
 上海戦は、  
 規模、  
 死傷者、  
 四万二千、  
 人、



南京城壁をよじ登る日本兵



水壕渡河する日本兵



誰も居ない陥落直後の市内



中華門を爆破する日本軍

# 日本軍は南京攻略戦をどのように戦ったのか (2)

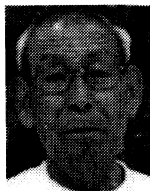
外摘全にろの焼の日本  
で発区無かできで軍  
はすに数、あ殺、軍  
る潜の城るさ十三が  
まこり脱内、れ三三  
だと込ぎで城た日つ  
数だん捨の内日この  
日けだて戦は本昼城  
間、こら闘森兵頃門  
激したのは為と遺あら  
した明軍は静体あ城  
い、ら服一まがた内  
戦こかが切りい、へ  
闘ので散な返く各入  
がよあ乱かつつ城つ  
続うるしつても門た  
いに、てたい見のの  
て城日い、たつ内は  
い内本た安、か側、  
たで軍、全敵つに、通  
ののに便区軍たは、の  
で戦残衣のは、常捕遮  
ある闘さにあ皆軌ら蔽  
はれたな無軌、をえ物  
全、たつり、を、を除  
な務敵でつすれ去  
かは兵進てるて去  
つそがむ殲戦生して  
たの、大と滅いききた  
が敵量、戦だたらから  
兵に道はつまま  
城を安路おたま

兵でこ国る中統て数実既十二  
士はに軍兵国いい名の、敵月  
達報死兵士軍てたの、三  
は道体士達独脱掲幕前兵十三  
、さのはを特出江僚夜は三日  
軍れ山、阻のし門だ城い日  
服、が前止残よかけ内なの  
を南築にす虐うらをでく黎  
脱京か進る非と南連パな明、  
ぎ虐れぬめた情たをてツて、敵  
捨殺るめめたを脱、クいたの  
てデと殺機殊、出突がたの  
安マにさ関部こし然起、銃  
全のなれ銃隊こた戦きかか  
区ネっ、でがでのつてくが  
に夕た後掃挹不でいてい  
逃に、ろ射江思あいたてい  
げな後かし門議る、各の  
込つにらたにな、部十城で  
んだこ押、待こそ下門を城  
の、が寄ニしがを夜八領登  
で方日せッて起知り八領す  
ある逃軍大にてつた兵、唐  
げに軍襲、た、士、北、生  
るよにわ逃、士、督、達、の  
こる圧れげ督、達、の、智  
とをのさ五そ隊我、先、司  
を諦とれ万うと、先、令、官  
め欧てのといに開、一、官  
た米そ中すうとい

こ城々登合うまらほ全き南  
ん門にるせ。で、どてい京  
な登途て夥進水のの、中  
闘頂つ中架しま濠水通華の  
い上てでけいねに濠門城  
がをゆ兵、犠ば仮がにの壁  
三日を占領し、日露戦争の旅順で、二百二十高地占領の戦いと同じであった。多勢に無勢ですぐに奪い返される。城門の奥行きは最も大

# 南京戦を戦った元日本兵達の証言

日本兵は強かったただけでなく軍紀厳正だった



古沢 智氏

## 熊本第6師団歩兵第11旅団歩兵第13聯隊第1大隊第1中隊第1小隊

- ・11/5～11/15 崑山から雨花台へ敵の後を追ひ強行軍。時に逃げる敵を銃撃した。
- ・雨花台の戦闘は大激戦だった。撃ち合いが始まるやいなや戦友二人が倒れた。
- ・雨花台街は敵の清野作戦で全くの廃墟でなにも無かった。
- ・12日深夜から13日午前にかけて敵は城門を閉めて逃亡。
- ・南京入城 中華門は四層のトンネル状でその内側には厚い土囊の壁があった。
- ・城内に入ると敵兵はいなかった。退却する敵を追って殲滅したかったが、谷師団長は敵に退却する時間を与え、無益な殺生を避けたと聞いた。



近藤平太夫氏

## 金沢第9師団歩兵第18旅団歩兵第36聯隊第3大隊第10中隊第2小隊分隊長伍長

- ・12/9 未明5時過ぎ光華門外濠に達したが、敵は城壁上より熾烈な一斉射撃、砲兵の射撃で突撃路を開いた。10日17時光華門攻略の命令、伊藤大隊長が突撃命令発し、第1、第4中隊が一気に城門内に突入。城壁上から敵の猛攻撃を受けたが肉弾攻撃により光華門上に最初の日章旗を翻すことができた。敵は奪還を目指し猛反撃。銃弾はうなり手榴弾が炸裂し死傷者続出。伊藤大隊長は「全滅を賭して光華門を死守するのだ」と奮戦したが遂に倒れ午後21時壮烈な戦死を遂げた。この門を13日迄死守し、同日未明敵の退却により完全に制圧。



喜多留治氏

## 金沢第9師団歩兵第6旅団歩兵第7聯隊第1大隊第2中隊満洲414部隊歩兵伍長

- ・中山門と光華門の間に二カ所の突破口をつくり、13日敵の逃亡とともに進入。
- ・12月14、15、16日の三日間にわたり安全地帯の敗残兵を掃討した。掃討にあたり連隊長より、外国権益への留意、住民に対する配慮、放火失火の注意、将校指揮下での行動、無用な他の軍隊の進入禁止、捕虜の食糧は師団に請求など嚴重注意があった。私は中国警官とパトロールしたが難民の死体のごろごろしていたなどの光景は見えていないし、滞在中一発の銃声も聞いていない。
- ・ある家屋の搜索では中に入ると敗残兵が多く武器とともに密集していた。



稲垣 清氏

## 京都第16師団輜重兵第16聯隊第6中隊陸軍獣医少尉隊付獣医官

- ・12/16 南京城に入城、虐殺があったとされる場所を幾度となく通ったが、死体の一つもその形跡すらにも遭遇したことはなかった。
- ・城外に逃げている市民も戻ってきて年の内に賑わいを取り戻していた。時計屋が最初に店を開き、記念写真やら饅頭屋もできた。安全地帯は憲兵と警備担当部隊の嚴重な監視の下に置かれていたので、暴行や放火や虐殺等は虚構である。
- ・南京を出て次の作戦地だった徐州の安庄では189人の捕虜を預かったが、夜間の警備を手薄にしてやったら最終的に全員が逃げていったが良くある事だった。



永田尚武氏

## 熊本第6師団歩兵第11旅団歩兵第13聯隊第3大隊砲小隊上等兵

- ・11/5～11/15 膠州湾から崑山迄の期間は一番苦勞した。敵の退路を断つ為、雨の中泥濘の道を砲を分解して強行軍しなければならなかった。
- ・雨花台の戦いは激戦で、敵機関銃をまともに受けた。トーチカに足を繋がれた中国兵は銃を死ぬまで猛射してきた。13日朝入城。敵兵の遺失物の片付けが主な仕事となった。安全地帯らしきところまで進んだがそこには住民が沢山居り、日本兵が他の日本兵の進入を防御していた。我々は安全地帯の外の城内に駐屯した。
- ・12/17 我々は蕪湖に向けて出発。残ったのは第3大隊の第10中隊だけと聞いた。



市川治平氏

## 京都第16師団歩兵第30旅団歩兵第33聯隊第2大隊第5中隊第1小隊長軍曹

- ・郷土部隊として出征したので郷土の恥となるような事はお互いに自制し慎んだ。犯罪者の汚名を着ては郷土に頭を上げては帰れないのである。日本を代表する戦士として出征したので、この誇りを持って敵軍に接し、住民にも接したのである。
- ・12/13 午後1時南京城に突入した時は市民の全員が安全区に避難していて、暴行などできる状態ではなかった。15日、16日には既に市民が露店を開き、街は中国人警官が護っていた。日本軍は将校と言えども安全区に立ち入ることは出来なかった。12月より1月下旬まで居たが、大虐殺の話など聞いたこともなかった。



野中祥三郎氏

## 独立輜重兵第2聯隊第2中隊2等兵

- ・学生時代に中国語を専攻。南京には38年の7月下旬から8月迄5、6日滞在。
- ・上官から命令で日本軍に対する南京市民の感情を調査したが、対日感情は悪くなく、日本兵を見ると女が恐れて逃げることもなく、横道に入り家の戸を叩いても怖じけたり恐れたり嫌がったりする事はなかった。
- ・市内は平穩で日本兵が多く、漢中路には日本商店も多く見られた。売春宿もあれば日本式風呂屋もあり番台には熊本出身の女性が座っていた。
- ・大通りは人通りが多く、馬車、トラックは見られたが乗用車は少なかった。



# 南京占領後の日本軍に依る治安回復

安全区は便衣兵の巢窟だった



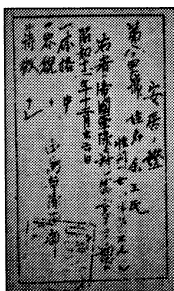
黎明曲一入高らか  
南京に盛大な發會式  
自治委員會宣言を發表  
昭和十二年一月三日 南京新聞



自治委員會成立を祝し城門に翻る日章旗



自治委員會メンバー



安居証



市民であることを確認して安居証発行

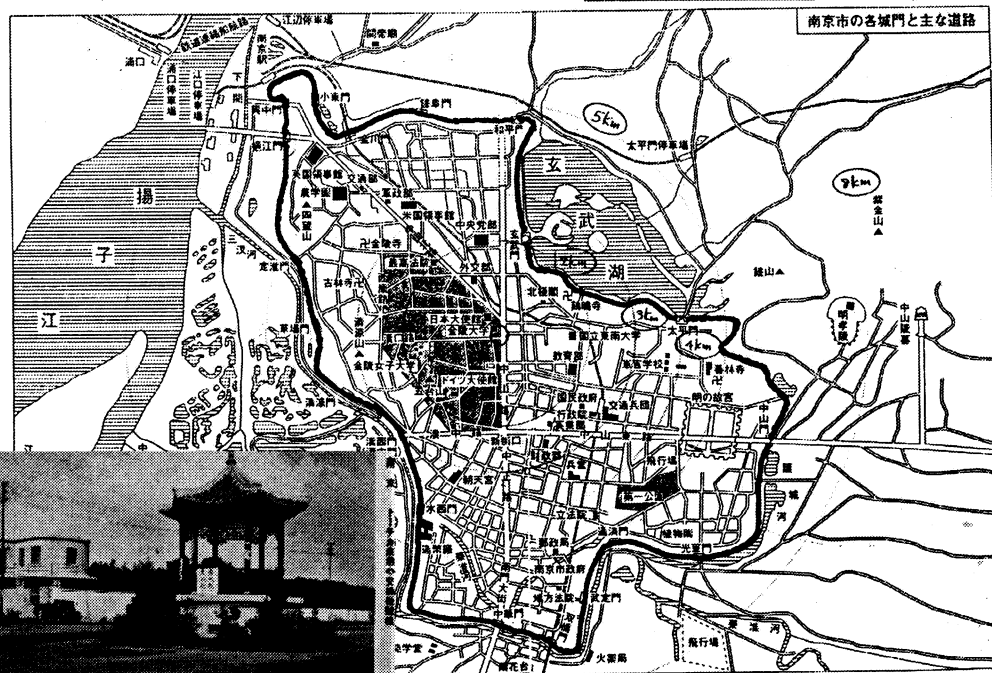
南京が陥落した時、安全区には少なくとも二十万の中国人が避難していたが安全区以外の市内は殆ど無人であった。安全区は本来中立地帯でなければならなかったが、中国軍の敗残兵が市民に化け、便衣兵となって多数紛れ込んでいた。速やかな南京の治安回復は国際的な観点からも最重要事項であり、その為には武器を隠し持ち戦う意思のある便衣兵の掃討は必定であった。南京攻略戦の日本軍は七万八千名だったが、数日の内に殆どの部隊は次の戦場に転進し、治安回復に当たった警備部隊の兵力は城内が約四千人、安全区は約千人だった。十二月二十八日の時点で、外国大使館や民家から中国軍將校二十三名、下士官五四名、兵卒一四九八名が、多数の武器と共に摘発された。彼らは略奪、強姦、反日攪乱行為の扇動を続けていたのである。(※1)

## 治安回復に関する事項

- 昭和十二年
- 十一月・一九 安全区国際委員会設置
- 十二月・十三 南京陥落
- 十二月・十七 南京入場式
- 十二月・十八 中支那方面軍慰靈祭
- 十二月・十九 第十軍の第十八・百一師団、第六師団は他の戦場に転進開始。
- 十二月・二一 安全区警備は第七連隊の二つの大隊約千五百のみ。
- 十二月・二三 上海派遣軍新配置に移行、第十六師団の一部を除いて南京を離れる。城内警備人数約4千人、安全区は約一千人。
- 十二月・二四 「自治委員会設立のための準備委員会」成立。委員長陶錫山、副委員長王春生、程浪派 委員孫淑榮 他。
- 昭和十三年
- 一月・一 難民区の兵民分離開始。「安居証」発行数二十四万人となる。
- 一月・六 南京市自治委員会成立
- 二月・一八 日本軍、国際委員会の解散、自治委員会への業務引渡しを要求。国際委員会は国際救済委員会と名称変更、解散させられた。

(※1) 『南京虐殺の徹底検証』 東中野修道著

0 1 2 3 4 5km 1/100,000



【『東洋歴史大辞典』（昭和13年、平凡社）を基に作製】

南京城地図：内部面積35km<sup>2</sup> 安全区面積3.86km<sup>2</sup>

# 南京城内に設けられた安全区とは何か

宣教師は中国の敗残兵を匿った

## 安全区の広さ

南京城内の北西部に安全区（難民区）は設置された（上図の黒く塗った部分・周囲の太線は城壁）面積は三・八六平方キロメートルで城内全面積（三五平方キロメートル）の十一％程度である。

南京市民の多くが住む南部の商店街、住宅街などは安全区から除外され主要官庁、大学、外国大使館（日本大使館含む）外国人邸宅等のある街区が安全区に指定された。

日本軍の入城前までには、残留住民二十万余りのほぼ全員が安全区に移動し、安全区以外は殆んど無人地帯だった。

## 中立地帯の役目を果たさなかった安全区

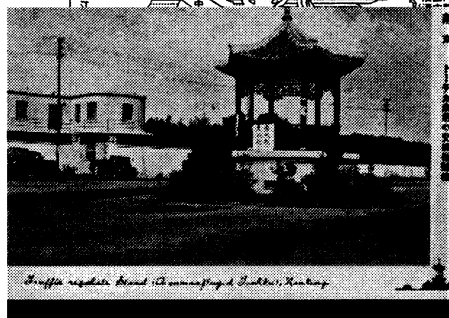
安全区国際委員会は十一月十九日（南京陥落の約三週間前）にアメリカ人宣教師を中心とする十五名によって組織され、委員長はドイツ人のラーベで活動の中心は米国人宣教師、大学教授だった。同委員会には警備能力は全く無かった。上海でジャッキーノ神父が設定した「上海南市安全区」の場合はフランス人兵士が警戒し中国兵の侵入を防止したが、南京の安全区は道路を境に区分され、所々に安全区を示す旗が立てられただけであり、中立地帯であるべき安全区に住民はもちろん中国兵も自由に出入りできた。

## 城塞都市であった南京城内

南京城は強固な城壁で固められた城塞都市であり、城内には砲台やトーチカが設けられていた。（写真参照）

後に安全区の掃討を担当した金沢第七聯隊は、安全区などから大量の隠匿武器（二十糎級砲八門、小銃九六〇挺、重機関銃一二挺等）を発見した。（\*1）なお日本軍は占領後の施政上で安全区を認めなかったが、これを尊重した。

大通りのトーチカ兼用交通標識楼



（\*1）『再現 南京戦』東中野修道著 平成十九年

# 南京城内と安全区で「虐殺」はあったのか



占領後、中山路をトラックで行く日本軍



占領直後の国民党軍政部の付近



避難民にまぎれ逃亡を企てた兵士 6500人



12/15日安全区で暮らす難民

日本軍が南京に迫りつつあった十二月八日、南京防衛軍司令官唐生智は「すべての非戦闘員は国際管理下の安全地帯に集結しなければならぬ」という布告を出した。特別許可証のない限り、安全地帯外での非戦闘員の移動は一切禁じられた。「少しでも怪しい者は手当たり次第に銃殺し、既にその数、百名に及んでいると、支那紙は報じている」（東京日日新聞十二月八日上海発）当時南京は、安全区外にいたら危険極まりない状態だったのである。

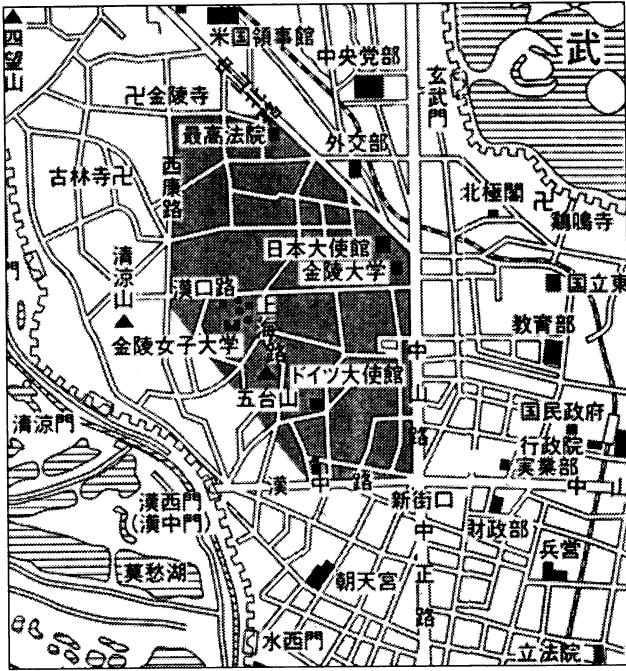
十二月十三日、日本軍が入城した時に兵士が「人っ子一人見なかった」と日記に記録しているのは当然のことであり、住民は全て安全区に逃げ込んでいたからである。国際委員会の十二月十七日付「安全地帯の記録」九号文書（英文）でも、「貴軍（日本軍）が城内に入った時、我々国際委員会にはほぼ全ての住民に安全地帯に集まってもらっていた」と書いている。従って虐殺があったとすれば、それは安全区内ということになるが、安全区の警備を担当した第七聯隊第一、第二大隊は、十三日の午後には掃討作戦をせず、夜間に安全区の視察を行った後、市の東南部に宿泊している。掃討作戦は十四日から行った。この間、他の部隊は安全区には全く入れなかったのである。そうすると、南京金陵大学のマイナー・ベイツ教授が十五日に南京を離れ上海に向かった記者達に渡したメモ（ベイツメモ）の次のような記述は、一〇〇パーセントあり得ない事になる。

「市内を見回った外国人は、このとき、通りには市民の死体が多数転がっていたと報告しています。死亡した市民の大部分は、十三日の午後と夜、つまり日本軍が侵入してきた時に射殺されたり、銃剣で突き殺されたりしたものでした」

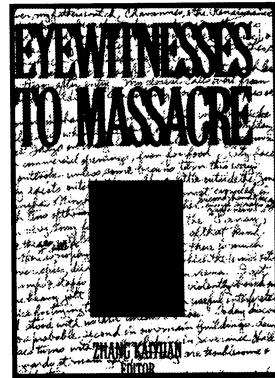
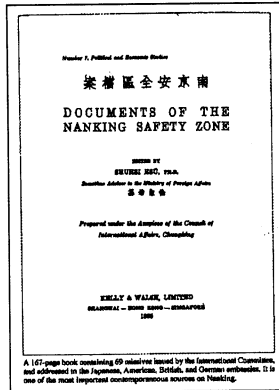
こんなウソ情報をもとに、ダーデンやステイブルらはニューヨーク・タイムスやシカゴ・デイリー・ニュースにベイツメモに酷似した記事を書いたが、一方、南京米領事館の副領事ジェームス・エスビーは、南京陥落時の中国兵について、「日本軍入城前の最後の数日間には、中国兵による市民と財産に対する侵犯が行われた。市民の服欲しさに殺人まで行った」と報告書に書いている。市民を殺したのは中国兵だったのだ。



# 南京城内と安全区で「虐殺」が無かった証拠



南京安全区の詳細地図（中央黒い部分）



「安全区」は三・八六平方キロ（ほぼ二キロ四方）の面積でそこに二〇万人住民がすし詰め状態で避難していた。もしここで、虐殺など行われたら四十万の目から逃れる事はほぼ不可能であろう。

安全区国際委員会は、Documents of the Nanking Safety Zone（南京安全区の記録）を残し、国民党政府の監修で上海の Kelly & Walsh 社から出版された。（上図）安全区の人口について次のように記録されている。

一九三七（昭和十二）年十二月十七日二十万、十八日二十万、二十一日二十万、二十七日二十万、一九三八（昭和十三）年一月十四日二十五万、これ以降も二十五万で推移している。

この数字は、虐殺による人口減が無かった事を雄弁に物語っている。

中国人の苦情申し立てを列記した記録がこの中にあるが、それによると殺人は合計で二十六件五三人となっている。ところが、この中で目撃者があるものは一件だけである。しかもこれは合法的なものとの注記がついている。死体確認されたものはゼロであった。四十万の目に止まったのがたった一件で、しかもそれは合法的なものというのが実態であったことが分かる。

Eyewitness to Massacre（虐殺の目撃証言）という本がアメリカのシャープ社から発行されている。（上図参照）南京に在住していたアメリカ人宣教師達十人が、所属団体や家族に宛てて書いた報告書や手紙などがエール大学図書館に保存されていて、それをまとめた本である。この中にはベイツ、フィッチなどの日本軍の残虐行為を記録した文書もあり、編集者はこれぞ「南京虐殺の目撃証言」というつもりでこの本を出したのである。ところが、虐殺捏造に加担したスマイス、フォスター、ミルズ、ヴォートリン、マギー等の家族への手紙を読むと、十三日の日本軍入城から翌年二月まで、彼らはただの一件も殺人など目撃していない事が判ったのである。（\*1）ベイツが書いた虐殺話（ベイツメモ）は、これで悪質な捏造であることが明らかとなり、この皮肉なタイトルの本が、「南京虐殺」の不在証明をしてくれたのである。上手の手から水が漏れ、良い見本であろう。

（\*1）アメリカ人の南京虐殺目撃証人は一人もいなかった（松村俊夫）

# 国際法に則った敵兵処刑は虐殺ではない

国際法の遵守は日本軍の誇り

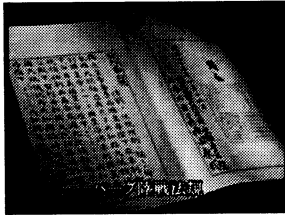


一人の日本兵に引率される捕虜となった中国兵



捕虜収容所

右はハーグ陸戦法規批准書  
1911年11月6日批准、1912年1月  
13日に「陸戦ノ法規慣例ニ關スル  
條約」として公布された



敗残兵に対する日本軍の方針は、国際法に則り、抵抗する者は殲滅し、逃亡しようとする者は逃がし、降伏する者は捕虜とし、ゲリラとして潜んでいる者は城の内外を問わず摘発して処刑した。

軍服を脱ぎ捨てて安全区に逃げ込んだ中国敗残兵（便衣兵）の掃討戦を、第七連隊が十二月十四日から開始した。掃討戦の成果表によると、

＊敗残兵刺殺数 〇六六七〇人  
＊鹵獲品 小銃九六〇挺（弾薬三九万発）、機関銃四五挺、拳銃一〇三挺（弾薬二六万発）、手榴弾五万五千発、青龍刀二千振、戦車四台、他多数の武器。

捕虜を軍律會議に掛けずに処刑したのは国際法違反だという主張が、一九八〇年代頃から盛んになされるようになった。しかし、まず基本的に捕虜としての資格のない交戦者は、処刑しても国際法違反ではない。足立純夫『現代戦争法規論』は次のように言っている。

「武装部隊は、戦争法規で明確に禁止されていない一切の手段をもって敵を攻撃し又は敵に抵抗する権利を有し、敵が抵抗を続けている限り、それを破砕することが出来る」正式の手続きを経て降伏してきた敵兵の処刑は国際法違反であるが、安全区に逃げ込んだ中国兵は降伏したのではなく潜伏、または偽装したのであり、掃討戦の対象となる。城外では一日以降も諸所で激戦が継続し戦争中だったのだ。

一九〇七年に署名された「ハーグ陸戦法規」（ハーグ条約）の交戦者の資格とは

- 一、部下のために責任を負うもの（指揮官の存在）
- 二、遠方より認識し得べき固著の特殊徽章を有すること（軍服の着用など）
- 三、公然兵器を携帯すること（兵器が見えるように携帯）
- 四、その動作につき戦争の法規慣例を遵守すること（戦争行動では法規を守る）

安全区に逃げ込んだ敗残兵は、民間人に化け（便衣兵）、武器を隠し持ち、統率力を失った兵隊達であり、この条項全てについて違反しており、交戦者の資格を欠く国際法違反の戦闘集団であるから、掃討戦の対象としてこれに対処したのである。すかわからない危険集団であるから、掃討戦の対象としてこれに対処したのである。この処置は完全合法的なものであり、軍律會議は、武装解除しただけではなく、治安確保が行われてからのことであり、戦闘が続き、殺すか殺されるかわからない危険な状況下の話ではない。

市民三十万虐殺論が根拠薄弱であることが明らかになってきた一九八〇年代頃から捕虜（敗残兵）処刑違法論が盛んに言われだした意味をよく考えるべきである。南京戦時安全区国際委員会が国民政府すらも敗残兵処刑自体は知っていたが欧米の大使館も、安全区国際委員会が国民政府すらも敗残兵処刑自体は知っていたが欧米の大使館も、戦争区間告発することにはなかつたのである。当時の国際法解釈からべきたら、捕虜の資格が及ばない敗残兵の処刑は、ここでも適用されなければならぬのである。

# 虐殺の証拠写真と言われる143枚は全て捏造写真だった！



# 南京虐殺は本当にあったのか？

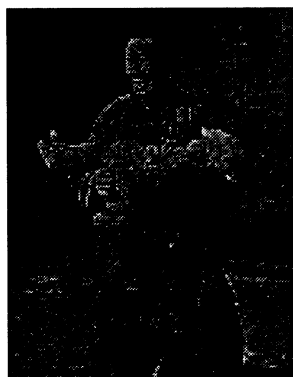
世界を騙した捏造写真の検証（1）

## 巧妙に演出されたデマ 宣伝用の写真

上の右端の写真はアメリカの写真雑誌『ライフ』が日本批判のため一九三七年十月四日号に掲載したものである。読者の選ぶ一九三七年ニュースベストの一〇に選ばれた。この写真は上海南市駅で撮影されたもので南京ではない。撮影者は中国系アメリカ人のH・S・ワントンという写真家である。

中央は「避難後の父子」と説明された『日寇暴行実録』に掲載された写真である。男性は泣き叫ぶ我が子を抱き上げようともしたが、一人が泣き叫んでいたのではない事が分かるだろう。

左はアメリカの宣伝映画『バト・ル・オブ・チャイナ』に出てくる場面、別の男性が幼児を抱え、線路の方に移動している。「父」はそっぽを向いている。かくて中国に対し世界の同情の嵐を巻き起こした右端の写真は巧妙に演出されたものだった。



## 写真の一部を切り取り 撮影時期を改変

上の右側の写真は、南京虐殺の宣伝写真として流布され、「子供を生き返らせよう」として死にも狂いの男」と説明されていた。

とところがこの写真は初出と思われる『ライフ』の一九三八年一月十日号によると、南京陥落の一週間前の十二月六日に撮影された。左の切り取った写真は、上の左側に写っている写真で、男の左側に写っている兵士ではなく、国民党軍の支那兵士である。

また、ニュース映画社による「バトン・オブ・チャイナ」の宣伝映画の一部としてこの写真の南京陥落後の日本軍に依る暴行の証明が分かるだろう。これは

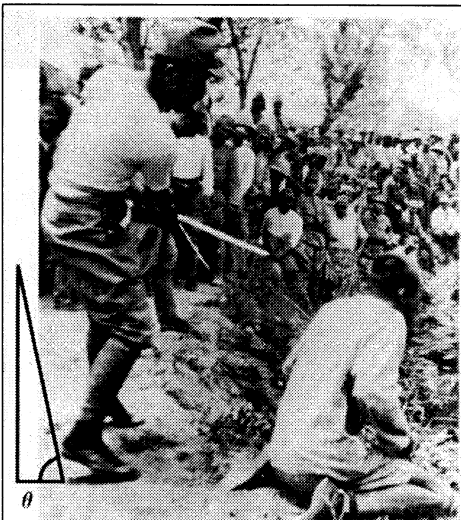
# 南京虐殺は本当にあったのか？

世界を騙した捏造写真の検証（2）

## 季節が違う！ 《影の角度と薄着》

左の写真はよく見ると踵の下に影が明瞭にできている。踵から影の端を結ぶ線と地面のなす角度は約七八度であり、南京の冬のほぼ正午の理論角度から見ると、南京が陥落した十二月ではなく五、六月頃の影と特定できる。それに、厳しい南京の冬のさなかに、半袖の薄着姿の兵士や一般住民などの姿はあり得ない光景である。虐殺の証拠写真と称するものにはこのように矛盾した写真が多いので注意が必要である。

なお、これだけの規模の公開処刑であれば記録が残っている筈だが全く無い。国民党中央宣伝部による演出の可能性も否定できない写真である。



影の角度では5月か6月の写真



## 写真の説明を改竄した代表例

上の写真は中国で昭和十三年七月発行の『日寇暴行実録』に掲載されたものだが、実は昭和十二年十一月十日の『アサヒグラフ』に掲載されていて「我が兵士に護られて野良仕事より部落へ帰る日の丸部落の女子供の群」とある。左の拡大写真では少女と少年は笑みを浮かべている。南京事件とは全く関係のない写真なのに、笠原十九司は自著『南京事件』で「日本兵に拉致される江南地方の中国人女性たち」と記述した。また、本多勝一はこの写真を『本多勝一全集十四』（朝日新聞社発行）に掲載し、「婦女子を狩り集めて連れてゆく日本兵たち」と書き、『強姦や輪姦は七、八歳の幼女から七十歳を超えた老女にまでおよんだ』と中国側から説明を受けたと記述している。

自ら検証することもなく中国側の説明を鵜呑みにして日本人を貶めた罪は許されない。

# 南京虐殺は本当にあったのか？

世界を騙した捏造写真の検証（3）

## 説明文の削除と でっち上げ

上の右側の写真は、南京陥落前の昭和十二年十二月五日号の『支那事変画報』（朝日新聞社）裏表紙であり、「支那民家で買い込んだ鶏をぶらさげて前進する兵士」と説明されていた。



翌年七月に、日本軍の暴虐の宣伝目的で中国で発行された『日寇暴行実録』では、写真の下側をカットして掲載し、「日本軍の行くところ略奪されて鶏も犬もいなくなつた」と説明されていく。また、平成七年発行の『本多勝一全集十四』でも、同じく下側がカットされて、日本軍が金を支払って買った事実を全く無視して「ヤギや鶏などの家畜は、すべて戦利品として略奪された」と改竄している。本多勝一は同じ朝日新聞の出身であるにも拘わらず、『支那事変画報』すら見てもいないとはあきれかえるほど杜撰な人物である。

## 流用写真と説明 文の削除

上の写真は南京市の「南京大屠殺記念館」の展示写真である。『朝鮮人強制連行の記録』の初版本巻頭グラビアページに掲載された写真であるが、点線で囲まれた説明には「土匪のメ惨殺サレタル鮮人の幼児」と記されておる。おそらく間島事件で虐殺された朝鮮人児童の写真であろう。この写真に付けられた説明部分の切り取り、そして「南京虐殺」の証拠として、今では「南京大屠殺記念館」の展示から撤去されているようだ。

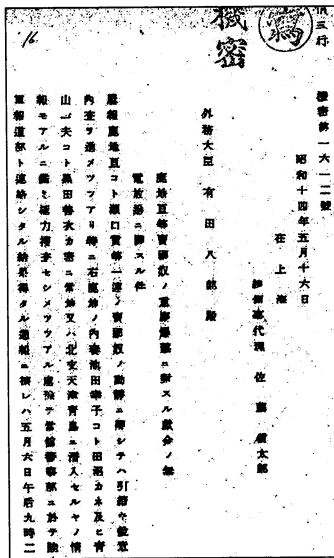




# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か（1）－国民党国際宣伝処



上の写真はオーストラリア人でマンチェスター・ガーディアン紙の記者だったティンバリーが、公正なジャーナリストを装って、「残酷な日本軍」を捏造した著書『戦争とは何か』の中国語版『外人目中之日軍暴行』である。



鹿地亘は1938年12月蒋介石の下で「日本人民反戦同盟」を結成した日本軍兵士への反戦活動に従事した。青山和夫は同時期武漢在住の朝鮮人を組織し「朝鮮義勇隊」を組織した。

南京陥落直前に宣伝工作は始まっていた！

国民党中央宣伝部の宣伝工作を記録した「極秘文書」には次のようにある。「対敵宣伝科は一九三七年十二月一日に工作を開始した。その時、南京、上海の撤退でわが軍は勇敢に戦争をしている最中で、当工作はまさに展開を謀ることに尽力し、前方の軍事に合わせて宣伝効果を発揮する時であった」(※1)

## 宣伝には国際友人を起用する

国民党中央宣伝部の国際宣伝処長となった曾虚白は次のように記していた。「われわれは目下の国際宣伝において中国人自ら決して前面に出るべきではなく、われわれの抗戦の真相と政策を理解してくれる国際友人を探し出して我々の代弁者となつてもらうことを話し合つた」(※2)

## ① 欧米の国際友人

ティンパリー（マンチェスター・ガーディアン紙の記者）は国民党中央宣伝部の顧問、ベイツ（南京金陵大学教授）は国民党政府の顧問、フィッチの妻は蒋介石夫人の友人であったことが判明している。その他、スマイス（南京金陵大学教授）、フィッチ（Y.M.C.A.）、マギー（宣教師）、ステイール（シカゴ・デイリー・ニューズ）、ダーデン（ニューヨーク・タイムズ）、マグダニエル（A.P.通信社）なども代弁者となつた（パネル24、29参照）。

## ② 日本の国際友人

鹿地亘（変名、瀬口貢）と青山和夫（変名、黒田善次）は『戦争とは何か』の日本語訳に協力。鹿地は昭和十三年三月に軍事委員会政治部設計委員、青山は六月に蒋介石の情報顧問となる。(※3) 二人が中国で工作中の売国奴である旨を、上海領事館は有田外務大臣へ報告（昭和十四年の極秘電、上図）している。

## 世界に反日の嵐を巻き起こした二冊の「宣伝本」

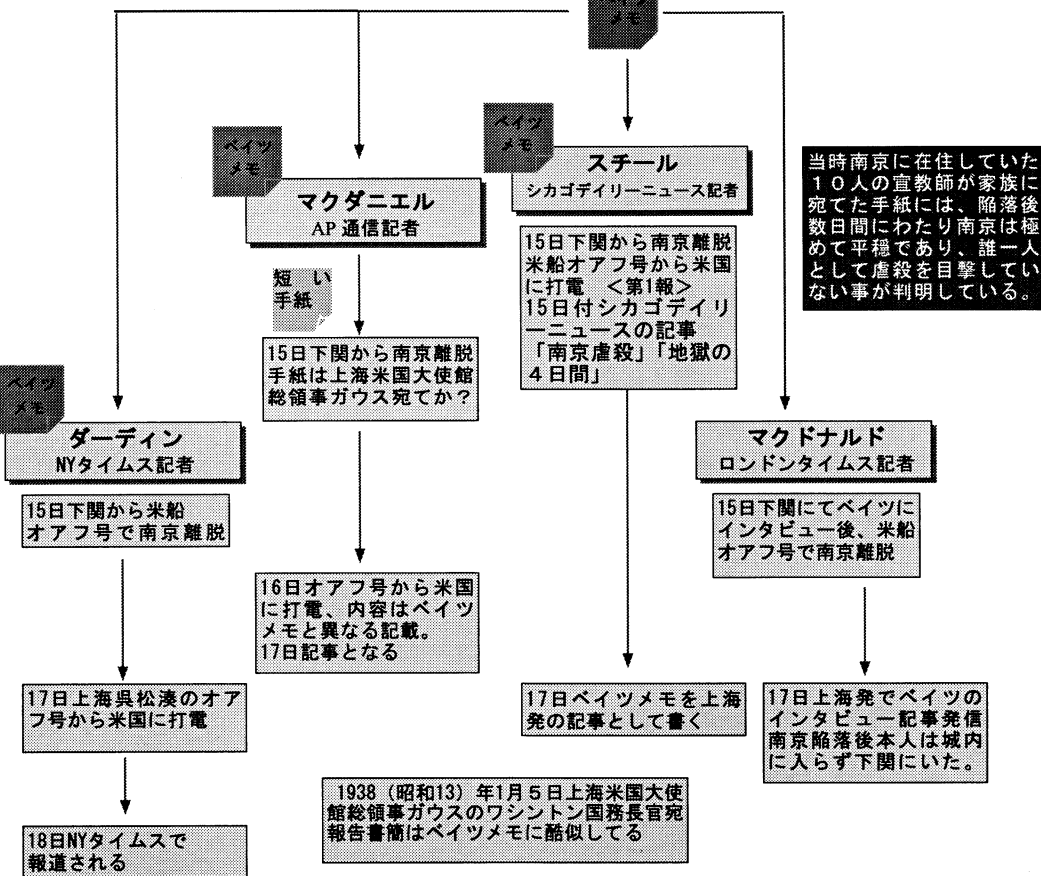
「我々は第一歩として、金を出してティンパリー本人と、彼に誘ってもらつたスマイスとに頼んで、日本軍の南京虐殺の目撃記録として二冊の本を書いてもらい、それを印刷して発行することを決定した。その後、この決定に沿って、彼は『日軍暴行紀実』を、スマイスは『南京の戦禍の真実』を書いた。……こうして我々は宣伝の目的を達成した。」(※4)

(※1) 『南京虐殺研究の最新線』展転社、平成十五年版  
 (※2) 『南京事件 国民党極秘文書から読み解く』草思社、平成十八年  
 (※3) 『日本兵士の反戦運動』同成社、昭和三十七年

# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か (2) ベイツメモと米国新聞

ベイツは12月13日から15日に掛け日本軍の残虐行為があったというベイツメモを作成15日に南京を脱出する報道人に渡した

外国人記者の「虐殺」  
国民党政府顧問・ベイツ  
のメモが情報源だった



当時南京に在住していた宣教師が家族と一緒に逃げたという証言は、南京陥落後、誰一人も見ていない。撃つて殺すという事実は明らかでない。

十二月十五日昼、上記外国人記者達は南京城内を離れた。つまり、彼らが見聞したのは、南京陥落後の脱出準備の慌ただしい十三日夕から僅か一日半強ということになる。

ベイツ(中華民国政府顧問)のベイツメモ  
日本軍は南京入城直後からの大規模な虐殺と蛮行によって、中国民衆からの同情と外国人からの尊敬を得る機会を失ってしまった。

スチールの記事  
地獄の四日間・日本軍は南京中国民衆からの同情と外国人からの尊敬を獲得できるまたとないチャンスをも、自らの蛮行によって失おうとしている。

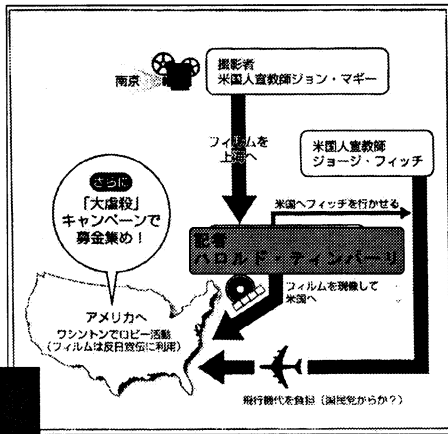
ダーティンの記事  
日本軍は現地の中国住民および外国人から尊敬と信頼が得られるはずの、またとない機会を逃してしまった。

マクダナルドの記事  
下関埠頭でベイツへインタビューした時の記事であり、ベイツメモと内容は重複している。

マクダニエルの記事(ベイツメモとは違う)  
十二月十六日南京発(米砲艦オアフ号より無線AP電)

かつてその繁華を謳われた中国の古都は、いまや町が被った砲撃と激戦により殺された防衛軍兵士及び一般人の屍体が散乱するありさまだ。町中に軍服が散らばる。潰走する中国兵が脱ぎ捨てて平服に着替え、日本軍の手による死を免れようとしたものだ。日本軍の猛攻に中国軍の防衛が崩壊し、南京から退却する間、少数の中国兵による散発的略奪があったが、彼らが去った後は少数の日兵の主張によって成立した安全区に砲撃をしないよう努めてきた。十万人以上の中国人が地区内に避難した。中国軍の安全区退去が遅い弾が少々落下し、数名が死んだだけであった。中国警察の多くは制服を脱ぎ捨て、下着のまま古い平服を捜しまわっていた。

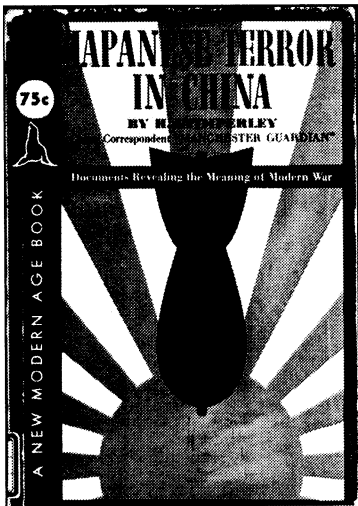
# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か (3) テインパーリ



上図はティンパーリのアメリカでの宣伝活動の一部を示す。ジョン・マギーやジョージ・フィッチ達と協力し、大虐殺のキャンペーンや募金活動、ロビー活動を通じて反日活動を行い、アメリカの中国支援を促した。工作費は国民党政府が負担した。



ティンパーリは謎の人物  
東京裁判に姿を見せず肖像写真も無い



ティンパーリ編『戦争とはなにか』(WHAT WAR MEANS)は(JAPANESE TERROR IN CHINA: 中国における日本の暴虐)の書名でも出版された

国民党中央宣伝部の顧問として海外宣伝工作で中心的役割を担う

ハロルド・ティンパーリ(中国表記・田伯烈)はオーストラリア人でマンチエスタター・ガーディアン紙の記者であった。国民党政府と協力し南京事件でつち上げ、日本に「南京虐殺」の汚名を着せ、世界に反日を広めた最大の功労者の一人である。「公正・中立な第三国人」を装い世界を欺いた。同盟通信社上海支局長の松本重治氏なども彼を信じていたが、その正体は国民党により欧米に派遣され宣伝工作に従事した人物で、後に国民党中央宣伝部の顧問に就任した。<sup>(\*)1</sup>

「南京虐殺」のでつち上げでは、彼と協力者のベイツの二人が中心的な役割を演じたが、ティンパーリは中央宣伝部の意向を受け、『戦争とは何か』(WHAT WAR MEANS、漢訳版『外人目観中の日軍暴行』)を編集発刊し、「日本軍の蛮行」のデマ情報を世界中に発信した。

中国国民党国際宣伝処処長の曾虚白は、「金」を出してティンパーリと、彼を介してスマイスに日本軍の南京における大虐殺の「目撃録」を二冊書いて貰ったと記している。<sup>(\*)2</sup>

また彼は国民党国際宣伝処のアメリカでの覆面の責任者として、「トランス・パシフィック・ニュース・サービス」の名の下で、全米各地に設立した拠点からニセ情報を流し続けた。<sup>(\*)3</sup>

## 『戦争とは何か』の編集方針が示すでつち上げ

ティンパーリはベイツとは旧知であった。二人の往復書簡の中で、『戦争とは何か』の編集方針に関して、彼はベイツに対し、「この本はシヨッキンゲンな本とならなければなりません。ここでは劇的な効果を挙げるためにも、学術的なバランス感覚は犠牲にしなければならぬと思うのです」と提案した。また、ティンパーリは南京周辺の被害をまとめた「スマイス調査」においても、深く関わっていたことが分かっている。

戦後、東京裁判に南京事件の重要証人として召喚されたが、出廷しなかった。また、彼の肖像写真は明らかにっていない。

(\*)1 『近代来華外国人名辞典』一九八一年  
 (\*)2 『曾虚白伝 上』一九八八年  
 (\*)3 『同右』及び『南京事件』について『権行』二〇一二年八月号



# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か (4) ベイツと国際委員会

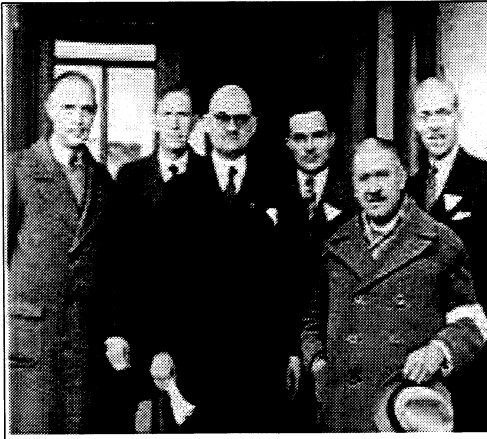
In Nanking With Ropes for Walls



Undaunted by the thunder of bombs and shells as Japanese battered at the gates of China's capital, Dr. Wm. Service Bates, above, of El Paso, O., professor of history at Nanking University and adviser to the Chinese central government, refused to leave his post inside the walled city. The U. S. embassy furnished Dr. Bates with wall-securing ropes to permit him to escape at the last moment.

南京陥落前後の新撰記者。ベイツ教授(写真)が中華民国政府顧問であったことを示している。

マイナー・ベイツ



国際委員会のメンバー

左からアーネスト・フォスター、ウィルソン・ミルズ、ジョン・ラーベ委員長、ルイス・スマイス、エドワード・スパーリング、ジョージ・フィッチ、



ジョン・ラーベ



南京安全区国際委員会

ベイツの正体は国民党政府顧問で「南京虐殺」捏造報道の黒幕。ベイツはアメリカ人の宣教師で南京金陵大学の歴史学教授であり、南京安全区国際委員会の有力な一員でもあった。また国民党政府の「顧問」でもあった。<sup>(\*)1</sup>この委員会は、南京陥落前の十一月十九日に発足、<sup>(\*)2</sup>南京在住の欧米人十六人で構成され、委員長はドイツ人のジョン・ラーベである。

## ベイツの二枚舌と「南京虐殺」陰謀のベイツメモ

ベイツは南京陥落三日目の十二月十五日、東京日日新聞特派員に、「秩序ある日本軍の入城で南京に平和が早くも訪れたのは何よりです」と語っている。ところが同じく十二月十五日、ベイツは、南京陥落三日後に南京を離れる欧米の新聞特派員五人に、「利用して下さい」とベイツメモを手渡している。その中には、南京城内での日本軍の殺人・略奪・強姦など、ありもしない残虐行為が「外国人の目撃談」として書かれていた。(ベイツ自身が当時日本大使館に渡していた「市民重大被害報告」にはこのような事は全く書かれていない)このベイツメモに基づいて米国の新聞二紙が、「南京虐殺」を世界で初めて報じた。(パナル「ベイツメモと米國新聞」参照)

## 「戦争とは何か」の陰のライターであった

ティンパリー編『戦争とは何か』に「日本軍は南京入城後直ぐに、四万人の中国人を不法に殺害した。うち少なくとも一万二千人は非戦闘員であった」などと匿名で執筆した。後の東京裁判でも同様な証言をしたものの、実際に虐殺屍体を自分の目で見たわけではなく、彼の証言は全て伝聞体である。

ベイツは一九三八年と一九四六年に戦争中の人道的奉仕に対して、国民党政府から勲章を授けられている。夫々、「戦争とは何か」の執筆、東京裁判での証言に対してであった<sup>(\*)1</sup>。

## 南京安全区国際委員会委員長ラーベの正体

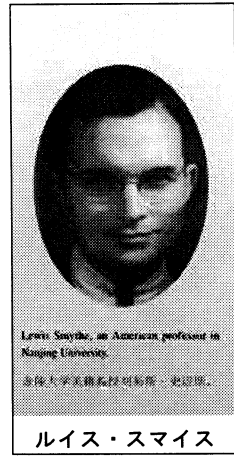
委員長のジョン・ラーベは、自宅に反日攪乱工作員の二人の中国軍将校を匿い、彼自身も日本軍の残虐行為を捏造する工作を手伝っていた。その理由は、武器商人として国民党軍との莫大な取引を維持するために、母国ドイツと日本の同盟を阻止しなかったのである。自らの利益のために虐殺を捏造するラーベの報告を信頼しなかったヒトラーは、後に彼を投獄した。<sup>(\*)3</sup>

(\*)1 『南京事件 国民党極秘文書から読み解く』二〇〇六年

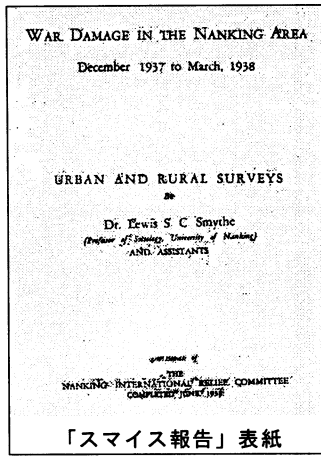
(\*)2 『南京の真実』一九九七年

(\*)3 講談社『南京の真実』は真実ではない！

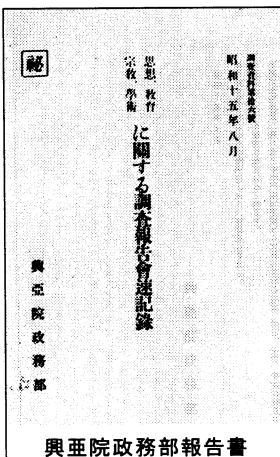
# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か(5) スマイルス



Lewis Smythe, an American professor in Nanking University.  
金陵大学美国教授ルイス・スマイス



「スマイス報告」表紙



興亜院政務部報告書

死傷原因別、死傷者数(都市部)

| 日付<br>(1937~1938) | 死亡原因 |       | 死傷原因 |       | 不明  | 合計    |
|-------------------|------|-------|------|-------|-----|-------|
|                   | 銃撃   | 毒ガス   | 銃撃   | 不明    |     |       |
| 12月12日以前          | 600  | —     | 50   | —     | —   | 650   |
| 12月12日            | —    | 400   | —    | 250   | —   | 650   |
| 12月14日~15日        | —    | 2,100 | —    | 2,200 | 200 | 4,500 |
| 12月15日~17日        | —    | —     | —    | —     | —   | —     |
| 合計                | 600  | 2,500 | 50   | 3,000 | 200 | 6,300 |

「スマイス報告」都市部の被害者数

死傷原因別、死傷者数(農村部)

| 県名 | 住民総数      | 死傷者数   | 死傷     |       | 病死者   | 合計     |
|----|-----------|--------|--------|-------|-------|--------|
|    |           |        | 男      | 女     |       |        |
| 江蘇 | 433,300   | 10,750 | 7,170  | 3,580 | 1,580 | 12,330 |
| 句容 | 227,300   | 9,140  | 6,700  | 2,440 | 610   | 9,750  |
| 句容 | 170,700   | 2,270  | 1,540  | 730   | 230   | 2,500  |
| 宜溧 | 110,900   | 5,630  | 4,000  | 1,630 | 600   | 6,230  |
| 六合 | 135,900   | 3,000  | 2,200  | —     | 800   | 3,000  |
| 合計 | 1,078,000 | 30,890 | 22,400 | 4,200 | 4,080 | 30,890 |

「スマイス報告」農村部の被害者数

テインパーリ、ベイツの一味だったスマイルスルイス・スマイルスは、ミッシェン系大学である南京金陵大学の社会学教授である。南京安全区国際委員会の書記として、難民保護に当たった。スマイルスは南京攻防戦後の一九三八年(昭和十三年)三月から六月の間に南京市内と郊外六県を対象に、戦争被害状況をサンプリングによって調査し、直ちに報告書(「スマイルス報告」)を出版した。この報告は、テインパーリの依頼を受けて作成されたものであり、「まえがき」はベイツが書いています。

## 恣意的な「スマイルス報告」

南京市内の人的被害調査は、五〇戸から一戸を選び、居住者に対し聞き取り調査を行い、その結果を五〇倍し集計した。その結果、兵士の暴行による死者は二四〇〇人と推定された。

南京郊外六県の調査は、南京市の七五〇倍の広大な地域をわずか十二人の調査員が延べ十五日間で行った。結果、「死者三万一千人」と推定された。この数字は、一週間ほどで走破し南京へ急進した日本軍が通過しなかった多くの地域の数字も含まれている。(※2)

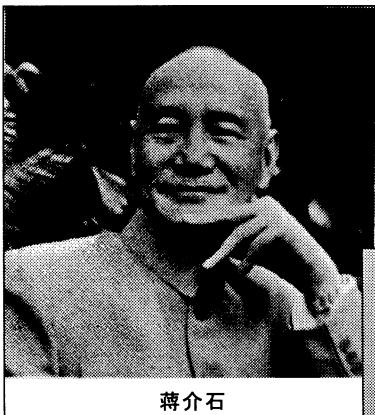
また前述の二四〇〇人の性別比率は、男子七三・五%、女二六・五%であるが、紅卍字会が城内外で埋葬した四一、二七八体の内訳、男子九九・五%、女子〇・五%と大きく食い違っており、具体的な数字とはかけ離れた結果となっている。「スマイルス報告」の特徴は、被害者数を推定するだけで、加害者が誰なのについては触れていない事である。従って、この「報告」は日本軍の残虐さを示すと取られる一方で、「南京虐殺」三十万を否定する数字でもあり、政治的效果を狙った恣意的な「報告」なのである。日本の虐殺肯定派は「スマイルス報告」を認めていないが、否定派の一部の人達は三十万虐殺を否定するものとして評価している。

## 当時、既に「科学的手法を装った報告」と見抜かれていた

興亜院政務部の吉田三郎氏が一九四〇年七月現地の調査に赴いた。「スマイルス報告」について、彼は「このようなものを世界に配って基金を集めている。科学的の研究を装った排日宣伝文書だ」(※3)と報告した。当時から信頼のおけない宣伝文書と見抜かれていたのである。

(※1)「北村稔『南京事件の探求』2001年  
(※2)「同右書」171p  
(※3)「思想、教育、宗教、学術に関する調査会速記録」一九四〇年

# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か (6) フィッチ



蒋介石

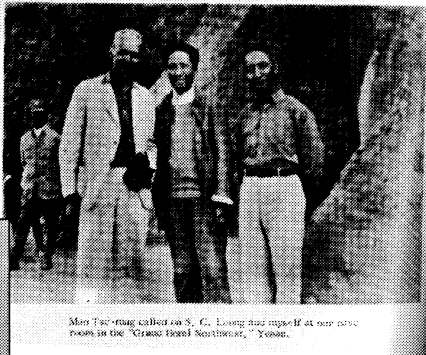


蒋介石夫人宋美麗



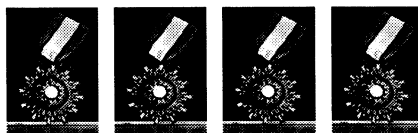
George Finch, Secretary of the American Young Men's Christian Association.

ジョージ・フィッチ



Men Finch called on S. C. Loong that night if at our native rooms in the "Cave" near Northwest, "Yoshu."

撮影時期は1940年？ 毛沢東と延安の洞窟前で（フィッチの正体は??）



上は国民党政府の青天白日勳章だが、民間人のフィッチが4回も授与されたのは、対米反日工作の成功によるものだろう。

ティンパリーの『戦争とは何か』の匿名執筆者だった

ジョージ・フィッチは一八八三年に中国蘇州市生まれの宣教師である。南京安全区国際委員会のマネジャー役の一方、YMCA（プロテスタント系キリスト教青年会）が中国青年将校を組織した勵志社の顧問でもあった。また、彼の妻と国民党政府の蒋介石の妻宋美麗は親友であった。「南京虐殺」を捏造したティンパリーの『戦争とは何か』に、大規模な虐殺、略奪、強姦の目撃者として匿名で執筆した者の一人であった。イエール大学所蔵のベイツの履歴書には「この本の第一章と第二章はフィッチが書いたもの」とある。（\*1）

## 国民党国際宣伝処の支援を受けた米本土での宣伝活動

フィッチは国民党国際宣伝部の依頼を受けて、宣教師マギーのフィルムを持って米本土で七か月近くの大講演旅行を行った。多額の資金と周到な計画を要したこの講演旅行は、国民党国際宣伝処の全面的な支援とティンパリーの協力なしには行えなかった。彼はロータリークラブの会員など交際範囲は広がった。更にワシントンでは国務省次官をはじめ議会や政府関係者に面会し、日本軍の蛮行を伝え中国への同情を喚起した。彼が米国の世論へ与えた効果は極めて大きかった。彼の米国世論への工作は国民党に高く評価され、その結果、フィッチは国民党政府から四回も勳章を授与されている。（\*2）

## 東京裁判へ出鱈目な口述書を提出

昭和十四年に編纂された『南京安全地帯の記録』において、フィッチが文責者として登場する事件は、僅か一件で、放火〇件であった。ところが、後に彼は東京裁判で簡単な口述書を提出し、殺人七件、放火三件もの事例を挙げた。口述書や『戦争とは何か』の中で、彼は、「商店の八〇%、民家の五〇%が焼失した」と言い立てたのである。彼の証言は全く信用できないものだったが、彼のような宣教師達の嘘が、日本を孤立無援の悪逆非道な国へと陥れたのだ。

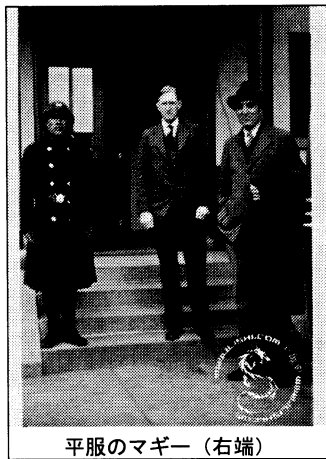
（\*1）「イエール大学所蔵のベイツの履歴書」

（\*2）古荘光一『南京大虐殺とドイツ軍事顧問』「III」誌「88年1月号」

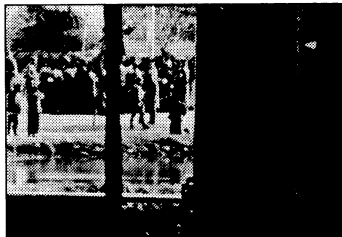
# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か (7) マギー



1937年12月13日南京陥落の日に安全区国際委員会玄関前で左から3人目ラーベ委員長、右隣がジョン・マギー牧師



平服のマギー (右端)

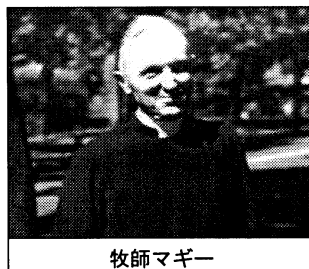


マギーが室内から撮影した難民の様子 (動画から)



A healing with an iron bar was given this 13-year-old boy who begged to go home when taken prisoner and starved.

マギー撮影・13歳の少年  
1938/5/6日号『ライフ』



牧師マギー

南京城内を撮影したマギーのフィルムは、米国での反日宣伝に使われた

マギーはアメリカ聖公会伝道団の宣教師であり、南京下関地区で教会を主宰し布教と医療活動を行った。南京国際赤十字委員会の委員長で南京国際安全委員会の委員でもあった。彼は南京城内や病院内の様子などを十六ミリフィルムに残している(通称マギーフィルム)。このフィルムに着目したテンパーリは、「このフィルムをもって米国で宣伝活動を行えば、中国人への同情が喚起される」(※1)と考え、フィッチに、日本軍の残虐行為を米国で広く宣伝させる反日工作に利用させた。(フィッチの項参照)

マギーの記録した不思議な大量殺害事件は今も！(夏淑琴裁判)

マギーの報告した「十二月十三日、日本兵がある家族十三人を強姦し、殺害した」という事件が『南京安全地帯の記録』にある。この『南京安全地帯の記録』は、十二月十四日以降の事件がほぼ日付順に事件番号が付されており、本来であれば一番最初に記される筈が、翌年一月二十一日の事件の後に二一〇番として登場する。非常に不自然である。その殺害内容も矛盾が多いことが指摘されている。(※2)

## 東京裁判とマギー証言

①前述の殺害事件は東京裁判でも重要視された。この事件についてマギーの他に許伝音も証言しているが、その証言内容はマギーの記録と食い違っている。  
②マギーは東京裁判で数多くの日本兵による殺人、強姦、略奪などについて供述したが、弁護人が「あなた自身はどれくらい現行犯を見たのか」と質問すると、「一人だけです」と答えた。ところがその「目撃」についてマギーは日記の中で「見ていなかった」と記しているのである。(※3)  
③マギーはまた、自らの証言を裏付ける写真は何枚も撮ったと言っていたが、なんと、そのフィルムを証拠として裁判に提出しなかったのである。いずれにしろ、マギーは表向きは宣教師であったが、その正体は「南京虐殺」捏造に深く関与した筋金入りの工作員であった。

(※1) 北村彦『南京事件の探求』二〇〇一年  
(※2) 『南京「虐殺」の徹底検証』一九九八年  
(※3) 『国民党機密文書から読み解く』二〇〇六年

# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か (8) 国民党と南京裁判



「南京虐殺」の冤罪を負わされ処刑された第六師団長・谷寿夫中将

△南京虐殺は世界史のワソ  
あれから二十九年目の昨今、記者はしきりに世界史の大ウソ極東軍事裁判でキーン検事が鬼の首でも取ったように、絞首刑の罪状の決め手とした、南京大虐殺事件(事実をデッチ上げた)の責任者として南京市中を引きまわしの上、雨花台に銃殺され、さらし首という人道に許すことのできない極刑に処せられた。わが谷師団長は実に、  
艦本兵団―日本全軍のニセの罪状を一身にかぶって尊い犠牲者の一人となった。勇将谷寿夫師団長の英霊に敬申し合掌。(昭四〇・一・一〇)(毎日新聞記者・現東京情報編集長―熊本放送40・3―)

南京戦を目撃した毎日新聞記者  
五島広作氏の昭和40年の談話

中国の「敵人罪行調査」に登場した被殺者三十万人

昭和二十年十一月七日、中国で「南京敵人罪行調査委員会」が組織され、市民への調査が実施された。その実態は、「此間、敵側の偽瞞妨害等激烈にして民心消沈し、進んで自発的に殺人の罪行を申告する者甚だ少きのみならず、委員を派遣して訪問せしむる際に於ても、冬の蟬の如く口を噤みて語らざる者、或は事実を否認する者、或は又自己の体面を憚りて告知せざる者、……(一)と云うものであった。

昭和二十年十一月とあるが、時期的に日本人に依る調査妨害など考えられない。また、「確定せる被殺者既に、三十万に達し、此外尚未だ確証を得ざる者合計二十万人を下らざる景況なり」(一)と記された。

この「敵人罪行調査」の結果は南京裁判、東京裁判に反映されたのである。

南京裁判で登場した「南京虐殺三〇万人」

昭和二十一年二月、谷寿夫元第六師団長(上図)はGHQによって逮捕され、南京軍事法廷へ移送された。昭和二十二年三月十日に判決が出て四月二十六日市内引き回しの上銃殺され、晒し首にされた。

谷師団長に下された判決書には、次のような殺害内容が記されている。

「：捕えられた中国の軍人・民間人で日本軍に機関銃で集団射殺された遺体を焼却、証拠隠滅されたものは、十九万人あまりに達する。このほか、個別の虐殺で遺体を慈善団体が埋葬したものが十五万有余りある。被害者総数は三〇万人以上に達する」(二)

谷師団長の率いる第六師団は、南京入城後は中華門一帯に駐屯し、十二月二十一日にはすべて南方の蕪湖に移動した。当時中華門一帯は激戦の場であり、住民はすべて避難しており、虐殺の対象となるような者はいなかったのである。

そもそも「三十万」という数字は、テンパリーが昭和十三年の初頭、日本の悪行をでっち上げるために世界に喧伝したものであり、彼は「戦争とはなにか」(昭和十三年)に「揚子江デルタ地帯における中日両国軍の戦闘の結果、少なくとも三〇万の一般市民が生命を失った」と記載した。(一)

テンパリーの言う戦争被害者三〇万人が、「南京虐殺三〇万」に捏造されたのは「南京裁判」の場であった。

は「南京裁判」の場であった。

(一)『日中戦争南京大残虐事件資料集 第一巻 極東国際軍事裁判関係資料編』青木書店 昭和六十年  
(二)『南京大残虐事件資料集 第二巻 中国関係資料編』青木書店、平成四年  
(三)『南京作戦の真相(熊本第六師団戦記)』東京情報社、昭和四十一年

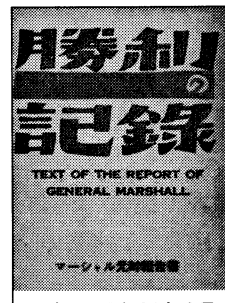
# 「南京虐殺」を捏造したのは誰か（9）米国と東京裁判



昭和20年8月6日広島被爆の惨状



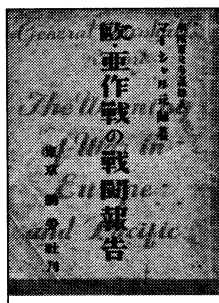
昭和二十年八月九日・長崎被爆  
死んだ妹を背負い直立不動で焼き場の前に立つ少年



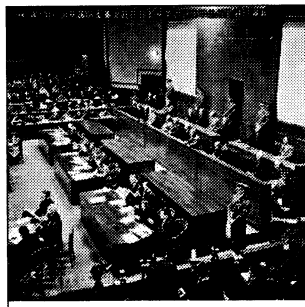
A本：昭和21年8月



マーシャル  
米国陸軍参謀長



B本：昭和21年11月



東京裁判法廷

「八月六日の週間は、紛争の連発する中で第一弾を放ち、遂に第二次世界大戦へと進展せしめた国民にとつて余りにも唐突な異変の週間であった。日本は奉天、上海、真珠湾、バタアンにおける悪逆に対し充分なる償ひをさせられてゐるのであつた。」（八月六日は広島に原爆を投下した日）  
英文の原本と翻訳本のA本には、日本軍の悪逆例として「南京」の記載がない。マーシャルはもとより、報告書の編集に携わつた米軍担当者、マンニチ社出版部の日本人の訳者、翻訳の校閲者にも「南京」など全く頭になつたのである。

ところが、三か月遅れて発行されたB本には「南京」が唐突に奉天の前に追加されている。時系列的には上海の後に記載すべきであるが、おそらく広島・長崎への原爆投下や無差別空襲による大量の民間人虐殺に匹敵する事例を、アメリカは南京に求め、自らの罪を免れるために、東京裁判で「南京虐殺」を捏造せざるをえなかつたのである。

## 文書の改変に協力した日本人

B本の監訳者の堅山利忠氏（明治四十年生れ）は戦後労働問題の専門家として拓殖大、創価大の教授となつてゐるが、国会図書館リサーチナビの堅山利忠関係文書によれば、「昭和元年三月第七高等学校造士館文科卒業、同年三月新人会加入、同年四月東京帝国大学経済学部経済学科入学、浜松日本楽器大争議に『新人会』から派遣、…一九二九年三月東京帝国大学中退、…」なる経歴を有してゐる。

「新人会」とは東京帝国大学にあつたマルクス主義に傾倒した団体であり、大学入学以前に「新人会」に加入し、また、学生の身分でありながら社会人の労働争議に関与するなどの行為から判断し、当時熱病の如く流行つたマルクス主義に心酔してゐたのであろう。昔も今も日本を貶める日本人が存在しているのである。





# 「百人斬り競争」は本当にあったのか？

悲劇は架空の武勇伝から

## 百人斬り超記録

向井106-105野田

両少尉さらに延長戦

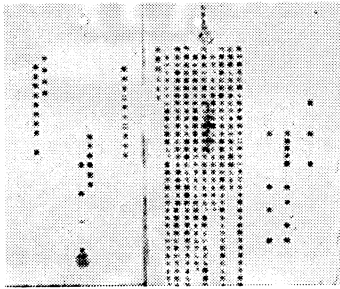


百人斬り競争の両將校

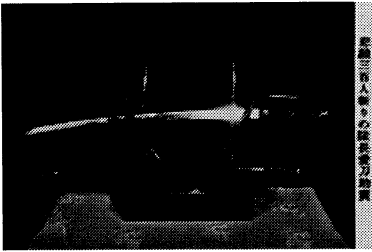
南京に十二日、日本軍「百人斬り競争」が行われ、向井少尉が106人、野田少尉が105人を殺害したと発表された。この競争は、南京陥落直前まで四回にわたって新聞記事にした。この記事が原因となり戦後、両少尉は「南京虐殺」の責任を負わされ、昭和二十三年一月二十八日南京裁判で中国政府に処刑された。

「百人斬り」競争とは、京都第十六師団は昭和十二年十一月中旬、揚子江岸の白茆口付近に上陸、以後西進し南京を目指した。従軍していた東京日日新聞の浅海記者らは、野田毅・向井敏明両少尉をモデルに武勇伝「百人斬り競争」を南京陥落直前まで四回にわたって新聞記事にした。この記事が原因となり戦後、両少尉は「南京虐殺」の責任を負わされ、昭和二十三年一月二十八日南京裁判で中国政府に処刑された。

「東京日日新聞」昭和12年12月13日  
常州城の城門を背にして



浅海記者の証明書



田中隊長の愛刀助広

「百人斬り」競争とは、京都第十六師団は昭和十二年十一月中旬、揚子江岸の白茆口付近に上陸、以後西進し南京を目指した。従軍していた東京日日新聞の浅海記者らは、野田毅・向井敏明両少尉をモデルに武勇伝「百人斬り競争」を南京陥落直前まで四回にわたって新聞記事にした。この記事が原因となり戦後、両少尉は「南京虐殺」の責任を負わされ、昭和二十三年一月二十八日南京裁判で中国政府に処刑された。

### 南京裁判で三十万虐殺の罪を被る

南京事件は日本軍が南京城に入城後に起きたとされているのであり、「百人斬り競争」は全く関係はない。南京裁判では、熊本第六師団の聯隊中隊長だった田中軍吉大尉（\*2）と共に三十万人虐殺の責任を負わされた。

なお、浅海記者は南京裁判に於いて両少尉に関する「証明書」を提出し、『両氏の行為は決して住民・捕虜等に対する残虐行為ではありません』と記している。

### 毎日新聞社（東京日日新聞の後身）「百人斬り」記事を完全否定

毎日新聞社は平成一年になって、「百人斬り競争」について、『この記録は当時、前線勇士の武勇伝として華々しく報道され、戦後は「南京大虐殺」を象徴するものとして非難された。ところがこの記事の百人斬りは事実無根だった』（\*3）と戦中の記事を否定した。

### 本多勝一氏の名譽毀損と裁判判決

この「武勇伝記事」を「中国の旅」（昭和四十七年）などで「殺人競争」と記述したのが本多勝一氏である。両少尉を貶めたとして平成十五年に同氏は名譽毀損で訴えられ、東京高裁は『「百人斬り競争」の実体及びその殺傷数について、甚だ疑わしいものと考えるのが合理的である』と判断した。

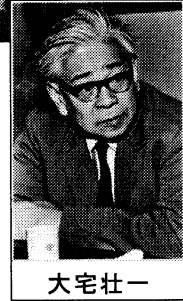
（\*1）『南京「百人斬り競争」虚構の証明』朱鳥社、平成二十三年  
（\*2）『皇兵』同盟出版社昭和十五年、「悲願三百人斬りの愛刀」と写真説明に書かれた  
（\*3）『昭和史全記録1926-1989』毎日新聞社、平成一年



# 「南京虐殺」を武器に日本侵略を謀る中国の野望



昭和12年12月12日南京  
東京日日新聞前線本部で  
右端が大宅壮一、隣が佐藤  
振寿（百人斬り事件の野田  
・向井両少尉の写真を撮影）



大宅壮一



朝日新聞社  
昭和47年



「南京事件」無関心の時代  
昭和二十四年、中国共産党が建設した雨花台烈士陵園の碑文は、当時共産党政府の敵であった国民党政府に向けられていたことを示している。  
「曾つて国民党政府は中国共産党の烈士三十万人を捕えて南京に送り、此の雨花台刑場において悉く踏殺した。それ等烈士の霊を慰めるためにこの陵園を建設した。」（\*1）（\*2）（\*3）  
その後、昭和三十年代には南京事件に関する大きな動きはみられない。

日本人を使った「南京虐殺」宣伝工作の開始  
南京陥落後、城内を見た評論家大宅壮一（上図）は虐殺などに触れていなかったが、昭和四十一年九月、文芸家視察団の一員として中国を訪問し、帰国後、虐殺に触れた。

「……入城前後、入城までの過程において相当の大虐殺があったことは事実だと思ふ。三十万とか、建物の三分の一とか、数字はちよつと信用できないけどね。まあ相当の大規模の虐殺があったということは、私も目撃者として十分いえるね。」（\*4）  
おそらく、中国側の意向を付度しての発言であろう。

日中国交回復前の昭和四十六年、朝日新聞社社員の本多勝一は中国の招きで中国に渡る。その目的は、「南京大虐殺」の被害者たちから直接話をきき、現場を訪ね歩くことであった。翌年三月『中国の旅』を出版。以後、同氏は共産中国に近い立場で、「南京虐殺三〇万」があったとの宣伝工作を各種著書などで開始した。

## 中国歴史教科書に「南京大虐殺」登場

昭和五十年版の「新編中国史」の歴史年表一九三七は、「国民政府は重慶に首都を移し、南京防衛は失敗した」という記載であったが、昭和五十四年の『中国歴史』に「南京大虐殺」の記述が登場した。

昭和五十九年に南京市文史資料研究会が編集した『証言・南京大虐殺』（和訳本、上図）は、南京裁判での「三〇万以上」殺害の判決を踏襲。翌年、「侵華日軍南京大屠殺遇难同胞纪念馆」が完成。その入口に「遭難者300000」と書かれた。（上図）

平成二十二年、「日中歴史共同研究」の中国側作成資料「四 南京大虐殺」は、南京裁判の判決を踏襲。共産中国は一貫して南京虐殺三〇万を主張している。

（\*1）『南京虐殺の徹底検証』展覧会、平成十年  
（\*2）『サンデー毎日』臨時増刊 昭和四十一年十月二十日号



平成20年5月5日、胡錦濤主席来日時に「南京事件の真実を検証する会」は「南京事件」の基本的な疑問点について、5項目の公開質問状を提出したが、未だに回答は届いていない。

このたび中華人民共和国国家主席胡錦濤閣下のご訪日に当たって、日中両国の友好を願う者として心より歓迎申し上げます。

さて、われわれは1937年12月に行なわれた日中南京戦に伴って起こったとされる所謂南京事件を検証すべく、研究して参りましたものです。貴国のこの事件に対する見解とその取り扱いにつき、深刻な憂慮を感じております。昨年南京屠殺記念館が大規模に拡張改装されましたが、一方で友好を唱えながらこのような非友好的なことを平然と行なう貴国に対して強い不信の念を感じざるを得ません。そもそも南京で大虐殺があったという論拠は最近の研究によって根本的に否定されつつあります。以下重要な5つのポイントについて閣下のご見解を伺いたく、謹んでご質問申し上げます。

- 1：故毛沢東党主席は生涯にただの一度も、「南京虐殺」ということに言及されませんでした。毛先生が南京戦に触れているのは、南京戦の半年後に延安で講義され、そして『持久戦論』としてまとめられた本の中で「日本軍は、包囲は多いが殲滅が少ない」という批判のみです。30万市民虐殺などといういわば世紀のホロコーストとも言わなければならない事件が起こったとすれば、毛先生が一言もこれに触れないというのは、極めて不自然で不可解なことと思います。閣下はこの事実について、どのようにお考えになりますか？
- 2：南京戦直前の1937年11月に、国共合作下の国民党は中央宣伝部に国際宣伝処を設置しました。国際宣伝処の極秘文書『中央宣伝部国際宣伝処工作概要』によりますと、南京戦を挟む1937年12月1日から38年10月24日までの間に、国際宣伝処は漢口において300回の記者会見を行い、参加した外国人記者・外国公館職員は平均35名と記録されています。しかし、この300回の記者会見において、ただの一度として「南京で市民虐殺があった」「捕虜の不法殺害があった」と述べていないという事実について閣下はどのようにお考えになりますか。もし本当に大虐殺が行なわれたとしたら、極めて不自然で不可解なことではないでしょうか？
- 3：南京安全区に集中した南京市民の面倒を見た国際委員会の活動記録が『Documents of the Nanking Safety Zone』として、国民政府国際問題研究所の監修により、1939年に上海の英国系出版社から刊行されています。それによりますと、南京の人口は日本軍占領直前20万人、その後ずっと20万人、占領1ヵ月後の1月には25万人と記録されています。この記録からすると30万虐殺など、到底ありえないとしか考えられませんが、閣下はいかがお考えでしょうか？
- 4：さらに『Documents of the Nanking Safety Zone』には、日本軍の非行として訴えられたものが詳細に列記されておりますが、殺人はあわせて26件、しかも目撃されたものは1件のみです。その1件は合法殺害と注記されています。この記録と30万虐殺という貴国の主張とは、到底両立し得ないと考えますが、閣下はいかがお考えになりますか？
- 5：南京虐殺の「証拠」であるとする写真が南京の屠殺記念館を始め、多くの展示館、書籍などに掲載されています。しかし、その後の科学的な研究（『南京事件の「証拠写真」を検証する』（東中野他・草思社）など）によって、ただの1点も南京虐殺を証明する写真は存在しないことが明らかとなっております。もし、虐殺を証明する写真が存在するのでしたら、是非ご提示いただきたいと思っております。そのうえで検証させていただきたいと思っております。

以上述べました5つの点は南京で大虐殺があったなどということを根本的に否定しているものとわれわれは考えざるを得ません。上記5つの点につきまして、閣下のご見解を承ることができれば幸いです。この問題は多くの日中国民の関心事と考えますので、公開質問状として提出させていただきます。子子孫孫までの日中友好を願うものとして、閣下のご高配を、衷心から期待しております。

平成20年5月5日／南京事件の真実を検証する会委員一同（代表・加瀬英明）

# 中国胡錦濤主席への公開質問状

なぜ貴方は質問に答えられないのか！



平成20年5月5日、胡锦涛主席来日時に「南京事件の真実を検証する会」は「南京事件」の基本的な疑問点について、5項目の公開質問状を中文でも提出したが、未だに回答は届いていない。

中华人民共和国国家主席胡锦涛阁下：

在中华人民共和国国家主席胡锦涛阁下访日之际，从希望日中两国友好相处这一心愿出发，我们对阁下来日本访问表示衷心的欢迎。

本委员会长期以来，对1937年12月伴随着日中两军在南京交战而发生的所谓南京事件进行了很多的验证与研究。由此，对贵国就这一事件所发表的见解产生了深刻的忧虑。去年「南京屠杀纪念馆」进行了大规模的扩建工程。我们对贵国这种一边鼓吹友好、一边公然进行不利于友好活动的作法深感疑虑。本委员会根据最近的研究结果从根本上否定了「南京大屠杀」的说法。借此机会就以下五个要点提出咨询，以便听取阁下的意见。

- 一、首先需要指出的是，贵国已故毛泽东主席在生前从来没有提及过所谓的“南京屠”南京战役发生的半年之后，毛先生在延安所进行的一次演讲时曾经提到过南京战役，这一演讲的内容后来被编入了《论持久战》一书之中。在这里，毛先生只是谈到“日本军经常对中国方面的部队进行包围，却少有进行歼灭”，而对所谓的“屠杀”只字未提。如果当时真是发生了对30万平民进行杀害这样一个可称为世纪性大屠杀事件的话，毛先生怎么会对此只字不提呢？这岂不是太不自然，太不可解了吗？对这样一个事实，阁下是怎样看待呢？
- 二、在南京战役开始之前的1937年11月，国共合作下的国民党在其中央宣传部内设置了一个国际宣传处。根据该国际宣传处所编《中央宣传部国际宣传处工作概要》这一机密文件的记载，在南京战役的前后，从1937年12月1日到1938年10月24日期间，国际宣传处在汉口举行了300次记者招待会，每次平均有35名的外国记者及外国使馆职员参加。但是，在这300次的记者招待会上，国际宣传处一次都没有提到过“在南京发生了对市民的屠杀”，也一次都没有谈到过“对俘虏的非法杀害”。对这样的一个事实，阁下又是怎么理解的呢？如果真发生了所谓的大屠杀的话，这难道不是非常奇怪，非常不可理喻的事情吗？
- 三、南京战役当时，有关国际委员会对集中到南京安全区内的南京市民进行了诸般照料，他们的活动纪录于1939年以《南京安全区档案 Documents of the NanKing Safety Zone》之名由中华民国国民政府外交顾问徐淑希编撰、上海的一家出版社发行，并由中华民国政府国际问题研究所加以监修。根据此书记载，南京市的人口在日本军占领之前为20万人，日本军占领之后也是20万人，并且在占领一个月之后的1938年1月·加到了25万人。从这样一个纪录来看，所谓的30万人大屠杀完全是不存在的事情。阁下难道不认为是这样吗？
- 四、上述的《南京安全区档案 Documents of the Nanking Safety Zone》这一出版物，还对当时发生针对日本军之不当行为的诉讼事件进行了详细的列举和纪录。根据这些纪录，杀人事件只发生了两起，其中被目击到的只有一起。并且，这起杀人事件还被注明为合法性的杀害。这样的记录与贵国所主张的30万人屠杀是不可两立的。对此阁下又是怎样认为的呢？
- 五、南京大屠杀纪念馆等中国国内的展览设施展示了被作为南京屠杀之“证据”的一些照片，这些照片还被其它的书刊所登载。但根据后来的科学研究(验证南京事件「证据照片」(东中野·草思社)等)判明，可以用来证明南京屠杀的照片一张都不存在。如果真有这些照片存在的话，请务必公诸于众，以便大家进行验证。

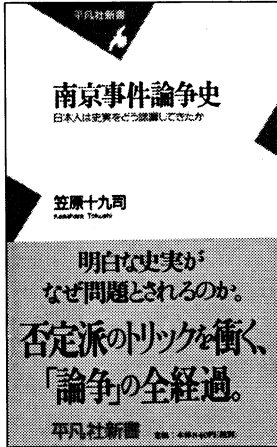
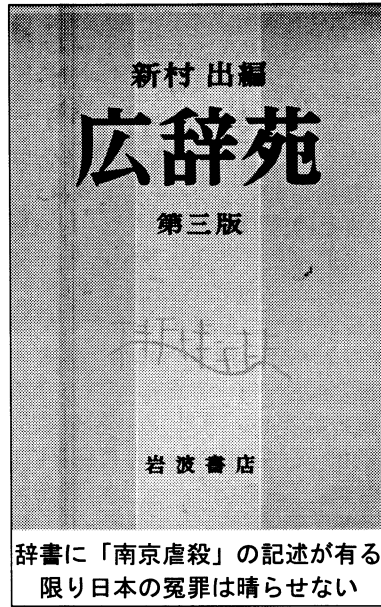
以上五项论点从根本上否定了南京大屠杀的说法，就以上五项论点敬请阁下务必给与答复。由于这些都是日中两国人民所共同关心的问题，我们以公开咨询信的方式将之提出。为了日中两国子子孙孙的友好，衷心期待着阁下的回应。

平成20年5月5日  
南京事件之真实验证委员会一同 (代表·加瀬英明)

中国胡锦涛主席への公開質問状 (中文) なぜ貴方は質問に答えないのか!

# 広辞苑に見る「南京事件」記述の大変貌

「南京事件」を削除せよ！



笠原十九司  
『南京事件論争史』  
平成19年

## 「南京事件」説明の変遷

左翼の出版社として名高い岩波書店の『広辞苑』は、日本を代表する辞書の一つであり、昭和三十年に出版された。初版から現在まで六版を重ねている。さて、「南京事件」の説明の変遷はどうなっているだろうか。

### 【第1版、昭和三十年】【第2版、昭和四十四年】

①一九二七年三月中華民国革命軍の南京入城にさいし、反帝国主義の革命軍の一部が日、英、米などの領事館に対して暴行したことによって惹起した事件（注・第一次南京事件の事）

②一九三七年十二月、日中戦争中の日本軍が南京攻略の際に行なった暴行事件

### 【第3版、昭和五十七年】

前記①は同じであるが、②の「暴行事件」が「大虐殺事件」という表現に変わった。

### 【第4版、平成三年】

「南京事件」は「南京大虐殺」の項を見よと「別立」となった。

日中戦争で南京が占領された一九三七年十二月前後に南京城内外で、日本軍が中国軍の投降兵・捕虜および一般市民を大量に虐殺し、あわせて放火・略奪・強姦などの非行を加えた事件

### 【第5版、平成一〇年、第6版・平成一二年】

第4版と基本的に変わりはない。

つまり、昭和四〇年前半代までは、昭和二年三月に蒋介石の国民革命軍が南京を占領した際、日本を含む外国領事館と居留民を襲撃した「南京事件」の方が大きな事件だった。昭和一二年のそれは「暴行事件」にすぎなかったのである。昭和四十六年、朝日新聞社は新聞や『中国の旅』などで、日本軍が中国で悪行を働いたとする報道を始めた。昭和五十七年、歴史教科書の表現の中国への「侵略」「進出」が騒がれ、ほぼ同時に広辞苑は「暴行事件」を「大虐殺」と書き換えた。このように朝日新聞社、岩波書店などが一部歴史学者（虐殺肯定派たち）と連携して、「南京大虐殺」を作りあげていったのである。

なお、虐殺肯定派の代表的人物である笠原十九司氏は、自著『南京事件論争史』（平成一九年）の中で、『広辞苑』の説明文を紹介しているが、第4版のみに言及し、第1版から第3版を全く無視している。





# 奇つ怪な裁判！中国で判決、日本で執行？中国批判封じ込めか？

## 夏淑琴とは何者か？

1937（昭和12）年12月13日、南京が陥落した当日の午前10時頃、南京城内の新路口の一棟の家に住んでいた二家族が、侵入してきた賊に依って11人が虐殺されたと言う事件があった。（新路口事件）その生き残りだと名乗り出たのが夏淑琴であり、侵入したのは日本軍兵士だとされている。彼女の証言以外に事件に関わる複数の証言があり、マギーフィルムにも記録されているが、これらの証言や記録には多数の食い違いがあり、日本人研究者の東中野修道氏が夏淑琴をニセ証言者だと記述した事に対して、夏淑琴は2006年5月名誉毀損裁判を起こした。裁判は最高裁まで争われたが、2009年2月、上告棄却となり東中野修道氏の敗訴が確定した。その夏淑琴が2012年7月、同じく研究者の松村俊夫氏と出版社の展転社を相手取って、中国での名誉毀損裁判で下された賠償金の強制執行を求める訴訟を、日本人弁護士「渡辺春巳」を訴訟代理人として東京地裁に執行を求める裁判を起こしたのだ。

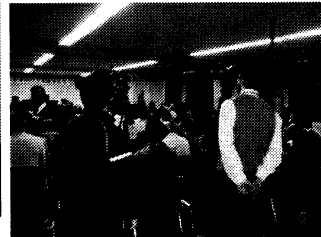
※事件の発生が午前10時だとすると、日本軍の城内進入は正午以降であり犯人は日本軍ではない。



夏淑琴



夏淑琴弁護士団



展転社支援集会

今般、東京地裁で奇怪な裁判が始まった。南京事件の自称被害者夏淑琴は、九年前、南京事件研究者松村俊夫著『「南京虐殺」への大疑問』（その海賊版）で証言の矛盾を指摘されたところ、名誉棄損による賠償金を支払えと、著者と出版社（展転社）を日本の裁判所ではなく、南京人民法院に提訴した。

著者と出版社は、同法院への出頭義務がなく、実際問題、出頭費用・翻訳費用・中国語に通じた弁護士費用等の負担に耐えず、応訴できない。応訴しても、南京大虐殺を国策とし、法治主義及び司法の独立のない共産党一党独裁国で著書側が勝訴する可能性など皆無である。又、南京事件を否定する日本人研究者がうかつに南京の裁判所に出頭した場合、生命身体の危険もある。やはり応訴できない。

南京法院は、案の定、ただちに被告らに一〇二二万円の賠償を命じる判決を下した。日中間に相互に自国の判決を相手国で執行できるといふ条約はないので、判決は日本では執行できないはずであった。ところが、夏淑琴は、今回、日本人弁護士を訴訟代理人として、東京地裁に中国の判決を日本で執行することを認めよという裁判を起こしてきた。

厄介なことに、この取り立て訴訟に日本での執行が認められるとの中央大学教授の意見書が添付されている。これは容易ならざる事態である。東京地裁の裁判官が安易にこの見解を採用する恐れ、また、裁判官が左翼親中派であれば、その恐れは益々高まる。

ほんの少し想像力を働かせられたい。言論の自由のあるわが国では、南京事件関連に限らず、多くの中国批判の著作がある。中国人がこれで精神的損害を受けたとして日本人著者や出版社を中国の法院に提訴すれば、事実上、こちらは応訴できず、次々と原告勝訴の欠席判決が出る。これを中国のエージェントのような日本人弁護士に取立委任をして日本人と出版社の資産を差押えることができる。中国人及び日本人エージェントにとつて、これはビジネスチャンスにもなる。ことは松村氏と展転社だけの問題ではない。結果的に、わが国に中国批判の言論の自由はなくなる。絶対に負けられない裁判である。



# 日本を貶める「南京虐殺」肯定派の日本人

日本が嫌いな日本人達

南京虐殺肯定の動きは昭和四十年代初頭から始まっている。虐殺肯定派の主な日本人を列挙する。

① **洞富雄（故人、早稲田大学教授）**

昭和四十二年に『近代史の謎』で日本の戦争犯罪を取り上げ、昭和四十七年に前著を踏まえた『南京事件』を出す。以後も『南京大虐殺「まぼろし」化工作批判』（昭和五十年）、『南京大虐殺の証明』（昭和六十一年）等で虐殺はあったと論陣をはる。

② **藤原彰（故人、一橋大学教授）**

元軍人（陸軍士官学校五五期）。『南京大虐殺』（昭和六十年）、『南京の日本軍—南京大虐殺とその背景』（平成九年）などを発行。

③ **本多勝一（元朝日新聞社社員）**

昭和四十六年八月から中国を廻り、翌年三月、『中国の旅』を中国側が用意した資料を基に出版。以後も『南京への道』（昭和六十二年）、『南京大虐殺の現場へ』（昭和六十三年）などを朝日新聞社より出す。南京大虐殺を広めた中心的人物。南京陥落七〇年時に中国から表彰を受ける。

④ **笠原十九司（元宇都宮大学教授）**

洞、藤原両氏なき後を継いだ学者。『南京事件』（平成九年）や共著『南京大虐殺否定論十三のウソ』（平成十一年）などを出版。南京事件関係の史料の選択に恣意性が目立つと指摘されている。（\*1）

⑤ **吉田裕（一橋大学教授）**

藤原彰氏に師事した。『天皇の軍隊と南京事件』（昭和六十一年）などを出版。虐殺数を十数万人以上とする立場を取っている。また、昭和天皇の戦争責任などについても論じている。

⑥ **松岡環（小学校元教師）**

『南京戦・閉ざされた記憶を尋ねて—元兵士一〇二人の証言』（平成十四年）を出版。百二名の兵士はみな『匿名』『仮名』であり、一〇〇〇ヶ所以上の間違いがある。（\*2）虐殺肯定派からも、「これほど間違いやおかしな表現の多い本もめずらしい。この本は度を越えている」（\*3）と非難されている。

本多勝一

故 藤原彰

吉田 裕

故 洞富雄

笠原十九司

※画像は全てネットに公開されているものを使用した

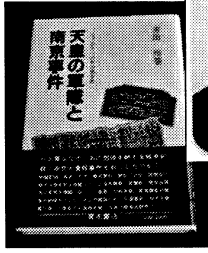
松岡環（左）と夏淑琴

## 中国の旅

南京の日本軍

洞富雄

南京戦



（\*1）『南京「虐殺」研究の最前線／平成十六年版』展転社  
 （\*2）『南京「事件」研究の最前線／平成十七・十八年合併版』展転社  
 （\*3）『週刊金曜日』平成十四年十二月二十日号

南京虐殺の嘘を暴いた日本人研究者たち 日本は彼らに感謝すべきだ！

鈴木 明



昭和 48 年、『「南京大虐殺」のまぼろし』を著し、洞富雄氏をはじめとする「南京事件」肯定派への反論の口火を切った。平成 11 年、『新「南京事件」のまぼろし』を発表、ティンパーリが国民党宣伝部の顧問であったことを明らかにした。ティンパーリの正体を暴いたことは、「南京虐殺」の否定につながる大きな功績

田中正明



昭和 59 年、『「南京虐殺」の虚構』を著し、東京裁判判決に疑問を提起。昭和 62 年、南京事件 50 年目の節目に『「南京事件」の総括』を刊行した。これは南京事件研究の先駆的な書である。

阿羅健一



昭和 62 年、『聞き書 南京事件』(後に『南京事件 日本人 48 人の証言』と改題)で、南京戦を経験した将兵、報道人などの生の声を収録し、南京事件の虚構を明らかにした。以後も『再検証 南京で本当に何が起こったのか』などを出版した。

東中野修道



平成 10 年、『「南京虐殺」の徹底検証』で内外の文献を駆使し、南京事件の虚構を総括的に解明。その後、『南京事件「証拠写真」を検証する』、『南京事件 国民党極秘文書から読み解く』、『再現 南京戦』により南京事件の虚構を示す基本構造を明らかにした。

松村俊夫



平成 10 年、海外文献などを精査し、南京事件の真相に迫った『「南京虐殺」への大疑問』を刊行。その後、米国人宣教師 9 人の私的な手紙などで構成されている『虐殺の目撃証人』には、本当は「目撃証人は一人もいなかった」ことを明らかにした。

藤岡信勝



平成 11 年、東中野修道氏と『「ザ・レイプ・オブ・南京」の研究』を著し、全米でベストセラーとなったアイリス・チャンの『ザ・レイプ・オブ・ナンキン』にある写真や説明文のデタラメにたいし、実証的に反論した。世界的に話題の本がトンデモ本であったことの証明は、南京虐殺肯定派には痛手だった。

北村 稔



平成 13 年、『「南京事件」の探求』を出版。中国・台湾の史料などを徹底的に調査し、南京事件が国民党の国際宣伝活動であったことを明らかにした。

富澤繁信



平成 15 年、『戦争とは何か』、『南京安全地帯の記録』、『戦史』などの第一次史料にある事件を全てデータベース化し、事件を定量的に捉えた『南京事件の核心』を刊行。以後も『「南京事件」発展史』などで、安全地帯内の些細な事件が、30万人虐殺に発展したことなどを明らかにした。

# 自由社教科書の「南京」記述に関する文科省検定経過の流れ図

(A) 申請図書（白表紙本） 225頁の注の記述 H22/4/21 提出

日本軍に依る南京占領の際に、中国の軍民に多数の死者が出たことが、のちに「南京事件」として宣伝されるもになった。

文科省検定意見

← 南京事件について誤解するおそれのある表現である。

著者・編集者への検定趣旨の口頭説明

← 学会の通説に従って（南京事件が）あったと書け。

↓ 第1次修正表提出

注記を削除する

第1次修正表に対する文科省とのやり取りあり

← 著者側は史実の選択の自由を根拠に注記の削除を主張

教科書調査官から編集者への電話での要求①

← 一文の後半を削除して注記を復活せよ。

日本軍による南京占領の際に、中国の軍民に多数の死傷者が出た。

教科書調査官から編集者への電話での要求②

← 「南京事件」を入れよ。

日本軍による南京占領の際に中国の軍民に多数の死傷者が出た（南京事件）

教科書調査官から編集者への電話での要求③

← 「中国の軍民に多数の死傷者が出た」の主語として、直前「日本軍によって」を入れよ。

これ以上の抵抗は検定不合格となる恐れがあり承諾した。

(B) 最終修正表提出＝検定済み供給本 h24/4から学校で使用開始

南京占領の際に、日本軍に依って中国の軍民に多数の死傷者が出た（南京事件）

## 他社の記述

育鵬社→「この時、日本軍に依って、中国の軍民に多数の死傷者が出た（南京事件）。この事件の犠牲者数などの実態については、様々な見解があり、今日でも論争が続いている。」

東京書籍→「この過程で、女性や子供を含む多数の中国人を殺害しました（南京事件）」

帝国書院→「南京では、兵士だけでなく、女性や子供を含む多くの中国人を殺害し、諸外国から「日本軍の蛮行」と非難されました（南京虐殺事件）」

清水書院→「南京占領の際は、兵士の他、捕虜や武器を捨てた兵士や老人・女性・子どもを含む非戦闘員も差別なく虐殺され・」

# 自由社教科書の「南京事件否定」を覆した文科省検定

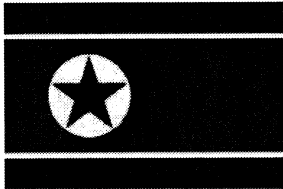


# 政府は「近隣諸国条項」を廃し「南京虐殺」を否定せよ！

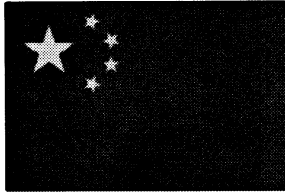
## 「近隣諸国条項」と「日本国憲法前文」が日本の未来をダメにする

近隣諸国条項→近隣諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いは、国際理解と国際協調の見地から、必要な配慮がなされていること。

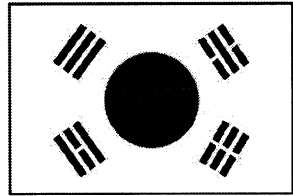
日本国憲法前文→平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。



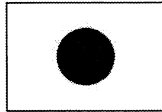
北朝鮮



中国



韓国



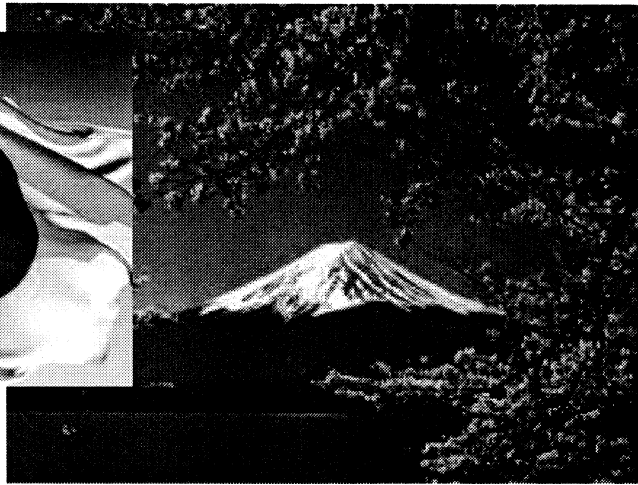
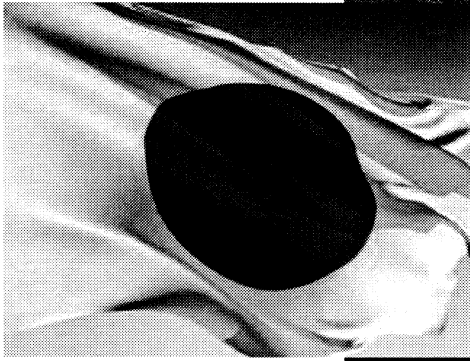
昭和五十七年、文部省が歴史教科書の検定の際、中国・華北への侵略を、進出、と書き直させたとの誤報記事が発端となり、中国・韓国の抗議を受けて、外交問題化した「教科書誤報事件」が起こった。政府は外交的な決着を急ぎ、その結果、教科書の検定基準に追加された条項が、「近隣諸国条項」である。

その条文は「近隣諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いは、国際理解と国際協調の見地から、必要な配慮がなされていること」。しかし、一見、もつともらしく見えるこの条文は、教科書の記述内容にまで外国の干渉を認める口実を与え、更に、日本国民のアイデンティティの基礎である自国の歴史解釈の問題としての我が国の近現代史の評価について、「東京裁判史観」に従うことを意味しており、歴史教科書の記述に、大きな負の影響を及ぼしたのである。

「南京事件」について、この条項を適用するに当たり、文科省の立場は、左翼系歴史学者の「南京事件はあった」とする説を学会の通説と認め、教科書に記載する場合には、事件の内容については、どのような記述をしても、特に、検定意見は付さないこととした。それまでは、「南京事件」は一部の教科書が記載する程度で、その内容や表現も抑制的であったが、この条項の適用で、全ての小中高の教科書に、この事件が記述されるようになり、その表現も、「虐殺」「大虐殺」と言った刺激的な言葉が使われ、更に、中国の主張する犠牲者数三十万人をそのまま記載する教科書まで現れた。

その後、南京事件の研究が進み事件の存否が問われるようになると、「南京大虐殺」と言った表現は少なくなり、犠牲者数も一般的には「多数の犠牲者」のように、数字を入れない記述が増えた。

南京事件が有ったとする文科省の立場は現在も変わっていない。しかし南京事件については、必ず記述しなければならぬ「必掲項目」ではないにも拘わらず、「虐殺」に触れなければ検定を通らないのである。この原因は「近隣諸国条項」にあり、中国におもねる日本政府が、教科書に必ず南京事件を記述させ「虐殺」が有ったと書くよう文科省に指示しているのだから。この結果は、自分たちの国や先祖を貶め、我が国に対する中国の歴史・領土侵略の餌食となっている。この条項は、直ちに廃棄すべきである。



# 「南京虐殺」の汚名を晴らさないと日本の未来はない！

パネル展をご覧いただきありがとうございます。

「南京虐殺はあったが南京虐殺はなかった」事をご理解戴けたと思います。胡錦濤主席に当たった公開質問状に中国は反論する事ができません。最近、中国虐殺は政治的な数字であり数は問題ではないと発言しています。これは、日本の名誉を守ろうとする献身的な日本の学者達による中国側の史料を使った精密な反論に、中国のデマゴーグが耐えられなくなった証拠だと言えます。遺憾ながら、日本には、中国さえ反論できない虐殺否定の明白な証拠を突きつけられても、虐殺はあったと主張し中国を喜ばせる学者達が存在することもまた事実なのです。彼らには父祖や子孫の名誉を護りたいという、人としての本能とも言うべき気高い精神が欠如していると思えません。憲法で保障された言論の自由とはいえ、中国に乗せられ国を危うくする言論の自由などあつてはならないことです。

「南京虐殺」問題は国内的には朝日新聞の日本を貶める謀略から起こったことですが、中国と事を荒立てたくない一心で、時の政府が安易に謝罪声明を発したことで、無かった筈の事が有った事と誤解され、国際的に日本は不利な状況に陥っているのです。それを助長しているのは中国・韓国・北朝鮮の反日歴史観に対し一定の配慮をすると言う「近隣諸国条項」です。この背景には、東京裁判と七年に亘る米国の支配下に於いて徹底的に洗脳された「戦争犯罪国家日本」の原罪意識があり、「中国を侵略した悪い日本」を前提にした中国との外交は日本の負け続きでした。その結果が中国による居丈高な尖閣・沖縄侵略の「愛国無罪」の行動に表れているのです。

国連に於ける日本の立場は、第二次世界大戦中に「連合国の敵国」だった国として、日本が戦争により確定した事項に反したり、侵略政策を再現する行動等を起こした場合、戦勝国は安理の許可が無くとも、日本に対し軍事的制裁を課すことが容認され、この行為は制止出来ないとして脅迫的に言及しているのは、この条項を念頭に置いているからでしょう。

「南京虐殺」問題を歴史問題と考えるのは間違いです。なぜならこの問題には歴史的な事実が全く存在しないだけではなく、荒唐無稽なデマで塗り固められたプロパガンダだからです。事実が伴う歴史問題ではないのですから、日本のとるべき道は、「南京虐殺」をでっち上げた東京裁判を否定し、中国が発した数々のウソを国際社会に向けて発信し続けることです。国内的には「近隣諸国条項」を撤廃し、これを抛り所として日本を貶める言論の正当性を無にすることです。「南京虐殺」などは無かったのです。日本人はそれを誇りに思い、中国の侵略に確りと対峙し、「強い日本」を再興しなければならぬと思います。

## 新情報が次々に暴く南京虐殺のウソ

「史実を世界に発信する会」事務局長 茂木弘道

### ないはずのものが突如「出現」した

昭和十二年十二月十三日、中国国民政府の首都南京が陥落し、日本中は沸き立ち、各地で提灯行列が行われた。百五十人もの記者・カメラマンが競って南京に乗りこんで取材し、続々と記事を送ってきた。

記事が伝える南京の状況は東京朝日新聞の十二月二十日号の写真特集のタイトル「平和甦る南京」に代表される市民の平穏と日本軍・自治委員会協力して復興に取り組む姿であった。占領五日目には早くも露天商が出て、兵隊が銃も持たないで買い物をしている。

これが占領後の南京の実情であったことは疑問の余地がない。南京はそんな広いところではない。世田谷区の七十%ほどの面積しかない。しかも市民は防衛軍司令官唐生智の厳命で国際委員会が管理する「安全区」にほぼ全員が集まっていた。国際委員会委員長が十二月十七日付日本大使館あての手紙にもそのように書いてある。

「安全区」はほぼ二キロ四方の広さであり、そこに二十万の市民が集中していたのであるから、まさにすし詰め状態といえるほどの密集ぶりであった。したがって、この狭い地区で四十万の「目」にさらされながら虐殺が行われた、などということは「絶対」にありえないと言いつけることができる。しかもここに、百五十人の報道陣が取材しまくっていたのである。ヤラセもこれではやりようもないし、戦後になり、日本軍批判全盛となっても、実は虐殺を見ました、写真もありましたなどという記者もいない。

ところがである。突如「三十万」という史上まれにみる大虐殺が実は南京でおこなわれていたのだ、ということが敗戦の翌年に始まった「東京裁判」で告発されたのである。

### 日本人は知らされていなかった？

東京裁判で南京虐殺の証拠として提出されたものは、東京裁判の命を受け急遽、南京に作られた「南京敵人罪行調査委員会」による調査報告書が主体となっていた。その報告書の前文には、一向に被害届も殺害目撃も出ないで苦心した様子が次のように書かれている有様である。

『進んで自発的に殺人の罪行を申告する者甚だ少なきのみならず委員を派遣して訪問せしむる際においても“冬の蟬の如く”口を噤みて語らざる者、或は事実を否認する者、或は自己の体面を憚りて告知せざる者・・・等あり。種々探索・訪問の方法を講じ、数次に互り行われたる結果、確定せる被殺害者は既に三十万に達し、この外尙未だ確証を得ざる者二十万を下らざる景況なり』

この全くのでっちあげ報告書証拠を基礎として、これを補強する強力な証言者として登場したのが、南京安全区国際委員会委員で南京大学教授のベイツであり、また同じく国際委員会委員で国際赤十字南京委員会委員長のマギー牧師であった。南京事件当時、南京に在任し、国際委員会メンバーとして活動していたアメリカ人たちの証言は、全く現実離れした南京市委員会の報告書が、さもまともなものであるかのような印象を与えたという意味で、極めて重要な役割を果たした。もしまともな証人尋問が行われたなら、ベイツもマギーも偽証罪で告発されること間違いなしであるが、そんなまともな法廷ではなかった。

こうして、南京虐殺三十万という(判決は二十万の所があったり、十萬の所があったりいい加減であるが)「世紀の虚偽」判決が下された。そして、この大ウソが日本でもあったこととして、教科書にも書かれることになったのである。

「日本人はこの事実を教えられていなかった」というのである。ひどいウソもあったもんだ。



ベイツは本当に信用できるのか？

敬虔な宣教師で南京大学教授、そして南京市民を救うために国際委員会を結成してその中心的な役割を果たした、とされるベイツであるが、そんな立派な人なのか？ 実ほとんどでもない実像がその後明らかとなってきたのである。

第一に、ベイツは何と国民党政府（蒋介石政権）の顧問であったことが判明した。東中野教授がイェール大学所蔵の南京関係文書の中の新聞記事の切り抜きに「中華民国政府顧問のマイナー・サール・ベイツ博士（上掲写真）は・・・」と書かれているのを見つけたのである。そればかりか、ベイツは国民党政府から戦前、戦後それぞれ一回ずつ勲章を授けられていたことも分かった。

ベイツがティンパリーの『戦争とは何か』という日本軍の暴虐を暴く本の資料をティンパリーに送っていたことは知られていた。中立の良心的ジャーナリストのティンパリーに南京における情報を提供していたと思われていた。ところがティンパリーの正体が明らかとなる。

ティンパリーが実は国民党宣伝部の顧問であることを最初に明らかにしたのは鈴木明氏であった。中国で発行されている『来華外国人人名辞典』に、「一九三七年の盧溝橋事件後、国民党政府は彼を英米に派遣し、宣伝工作に当たらせ、ついで国民党宣伝部顧問に任命した」と書かれていることを発見したのである。

したがって、ベイツとティンパリーは共謀して反日書籍『戦争とは何か』の作成を行っていた、ということなのである。良心的宣教師の大学教授という仮面の下で、デマ情報に基づく謀略宣伝文書作成に携わっていたのである。

さらにティンパリーについては、国際宣伝処長虚白の『自伝』に、宣伝本として『戦争とは何か』を書かせたこと、さらにアメリカに作った覆面ニュースリリース会社「トランス・パシフィック・ニュースサービス」の責任者に任じていたことまでが書かれている。

要するに国民党の中心的な宣伝工作員であったことが明白となったのである。

ニューヨーク・タイムズ、シカゴ・デイリー・ニュースに出ているから虐殺はあったのか？

ニューヨーク・タイムズ（一九三七年十二月十八日）には「捕虜全員殺害され、市民も殺害、南京に広がる日本軍の恐怖、陥落後の特徴は屠殺」という見出しの後、「日本軍は南京で大規模な残虐行為と蛮行を犯したことにより南京住民や外国人から尊敬と信頼を勝ちうる又とない機会を失ってしまった」と書かれている。

シカゴ・デイリー・ニュースにも、「日本軍は中国民衆の同情を獲得できる、又とないチャンスを、自らの蛮行によって失おうとしている・・・日本の機関銃隊が月明かりの中街路を走行し、走るものならだれでも：射殺した」とある。

ニューヨーク・タイムズの記者ダーディンも、シカゴ・デイリー・ニュースのステイルも十二月十五日には南京を離れているのでこれらの記事は、実見に基づくものではありえない。しかも、極めて類似した内容、表現になっているところを見ると、何か特定の情報に基づくものであった可能性が高い。

それが明らかになったのである。ベイツが一九三八年四月十二日に「諸友宛て」に書いた手紙（Eyewitness to Massacre 所収）に「その本『戦争とは何か』には十二月十五日に南京を離れようとしていたさまざまな特派員に利用してもらおうと、私が同日準備した声明が掲載されています」とある。

どんな声明か？

「二日もすると、度重なる殺人、大規模で半ば計画的な略奪、婦女暴行をも含む家庭生活の勝手きまわる妨害などによって、事態の見通しはすっかり暗くなってしまう。市内を見回った外国人は、この時、通りには市民の死体が多数転がっていたと報告しています・・・死亡した市民の大部分は、十三日の午後と夜、つまり

日本軍が侵入してきたときに射殺されたりしたものでした。・・・」  
要するにこの声明をもとに、ダーデンもステイールも記事を書いたということである。従って、ニューヨーク・タイムズなどに南京虐殺が書かれているからといって、南京虐殺の証明などにはなりえないのである。

### 希代の Dau っつき ベイツ



ベイツ

このベイツの書いていることが現実とかけ離れたいかにデタラメであるかは、冒頭に掲げた占領直後の南京の状況と比べてみれば誰でも理解できよう。度重なる殺人を繰り返す日本軍が武器も持たないで露店に出掛けるなどということがあり得るはずもない。

実はベイツのこの記述は、同僚の同じく金陵大学教授で国際委員会の事務局長を担当していたスマイスの家族への手紙によって、一〇〇%否定されるのである。二月二〇日付家族への手紙には次のように書いている。

『二月一三日月曜日朝) 宿舎へ帰る途中、午後一時に日本兵が漢中路に到達しているのを見つけた。我々は車でそこへ行き約六名の小さな分遣隊に会った。それが最初だったが最後ではなかったのだ。上海路と漢中路の交差する角で、彼らはバスを調べたが、人々を傷つけることはなかった。』

『十四日火曜日の朝。我々は目覚めて戦いは終わったと感じていた。・・・今は日本兵がいる。秩序ある体制と順調な事態が作られて、状況はバラ色になるだろう。』

このどこにも、ベイツが書くように十三日の午後と夜、日本軍が市民を片端から射殺したことをうかがわせるものはない。十四日の朝、戦いは終わったとの思いを書いていることを見ればそれがよくわかるだろう。ベイツとスマイスはこの時同じ宿舎に起居していたのだ。

このスマイスの家族への手紙(極めて詳細なもので、その後二月までカバーしている)は、"Eyewitness to Massacre" (虐殺の目撃

者)と題するアメリカの M. E. Sharpe 社から発行されている本に掲載されているものである。九人の宣教師の手紙がこの本には掲載されているが、それらを忠実にたどっていくと、ただの一件も虐殺の目撃は出てこないのである。表題と全く逆のこと。虐殺は存在せず、皮肉にもこの本によって完璧に証明されたのである。ベイツのウソはこの『虐殺の目撃者』という虐殺を証明したはずの本によって、完全に証明されてしまったのである。

### 全く架空の非戦闘員 1万2千人説を主張したベイツ

この聖職者は、蒋介石政権のためになることならどんなウソでも平気でつく人間だったようである。

国際委員会の活動記録というべき "Documents of the Nanking Safety Zone" (南京安全区の記録) (国民党の監修で上海の Kelly & Walsh 社から一九三九年に出版) には、南京の人口は、陥落時二十万、一月中旬二十万、一月十四日に二十五万となっていて、虐殺による人口減など全く想定されていない。これが国際委員会メンバーの共通認識であったわけである。

ところが、国際委員会の中心メンバーであったベイツは奇怪なことを言い出す。ティンパリーに送った南京情報として四万人の埋葬記録(これは戦死者の遺棄死体埋葬であって虐殺とはもともと関係のないもの)を取り上げ、このうち三十%は、決して兵士ではなかったと言いつたのである。つまり市民一万二千の虐殺が、国際委員会の共通認識を全く否定し、しかも何の根拠もなくこういうことを言い出したのである。

スマイスの「南京地区における戦争被害調査」(都市部)では、サンプル調査手法による調査結果として、二千四百人が兵士の暴行によって死亡したと報告している。しかし、これは性別情報などから全く信憑性のないものであることが明らかとなっている。しかし、問題はベイツである。数表で二千四百と出ているにもかかわらず、ベイツが書いた注記には、市民一万二千の殺害ということが、

何の根拠もなく平然と書かれているのだ。ウソを言うことに何の罪悪感も感じない「聖職者」であったようである。

こういう勝手な嘘八百を書いた人間の説を後生大事に基本的な重要情報とする「学者」も学者であるが、こんなウソを平気でいう人間を何かまともな人間扱いした上で、南京事件を論ずる人が多いことこそが大問題である。

要するにこんなとんでもないウソつきであることは今では、完全に実証され、しかもベイツは国民政府の工作員であることも明らかになっているのだ。歴史学者は一体何をしているのだ。

東京裁判は、南京における調査委員会が苦勞してウソ情報をでっち上げた報告書をベースとし、この希代のウソつきである宣教師にして南京大学教授ベイツのウソ証言によってそれを信用させることで「南京虐殺」を成り立たせたものである。今やこのことが明確に実証できるようになったのである。

### 南京学会が果たした役割

このように次々に明らかになってきた事実によって、南京虐殺なるものは戦時宣伝謀略戦としてつくられたものであり、もともと存在していないものであることがあきらかになってきた。

南京事件についてのこうした事実の発掘、真相究明を主導したのは、東中野修道、細野大教授によって平成十二年十月に設立された“日本「南京」学会”である。本年九月十五日に最後の総会を開き、活動を終了した。

実質的には既に南京事件の真相については「勝負あり」なのである。しかし、未だ真実が、歴史学会において、又教育界において正式に認知されるに至っていない。これからは、「南京学会」ではなく、国民運動として、広く国民に訴え、そして国民の声として、学会に再考を迫り、マスコミに真実の公開を迫り、文科省に正しい歴史事実を教科書に載せるように要求していくべき段階なのである。

### 捏造された「南京大虐殺」

ビジネス研究所 加藤 浩康

#### アヘン戦争以降、続く内乱状態

南京大虐殺は、南京攻略後九年も経過した東京裁判で戦勝国支那の捏造によって急遽話題となり喧伝され、また東京裁判と並行して、GHQの要請でNHKがラジオ放送を通じて全国の茶の間に流した「真相はこうだ」で知らされたものです。

南京戦当時、何かにつけ分の悪いことは針小棒大に捏造して国際連盟に提訴する習慣のある蒋介石が、提訴もしていません。なぜ、東京裁判で、また南京大虐殺が突如できたのか。米国の原爆投下、ソ連による占守島・歯舞諸島への侵略等々、連合国側の不都合を隠蔽するためであったという考え方もできます。

中華人民共和国（中共）は、昭和四十七（一九七二）年の国交回復後、歴史教科書への南京大虐殺の掲載、江沢民時代に開始された反日教育とプロパガンダを繰り返します。

西安・盧溝橋事件以降、日本の不拡大方針のもと和平交渉が進捗し締結間際になると、支那側から交渉を打ち切らせるような事件が突発し、和平実現は水泡に帰しています。その要因は、西安事件を境に「掃共から容共」に転じた蒋介石で、昭和十年にモスクワで開催された第七回コムintern世界大会におけるスターリンの演説は、日支を戦わせよの第一歩でした。

『ドイツと日本を暴走させよ！ その鋒先を祖国ロシアへ向けさせてはならない。ドイツの鋒先はフランスと英国へ、日本の鋒先は蒋介石の中華民国へ向けさせよ。そして戦力を消耗したドイツと日本の前に、最終的には米國を参戦させて立ちはだからせよ。日・独の敗北は必至である。そして日・独が収奪した地域……と、疲弊した日・独兩國をそっくり共産主義陣営にいただくのだ』

#### 南京戦と捏造された南京大虐殺

#### ①南京戦の経過

第二次上海事変で日支の全面衝突が始まった後、日本軍は上海付近の敵を掃討して戦争を終結させるため、昭和十二年十一月七日に中支那方面軍を編成。上海西部の蘇州から嘉興を結ぶ線までを作戰制限区域とします。

十一月十六日、南京の国民政府は重慶への遷都を宣言。中支那方面軍は独断で作戦制限区域を越え、さらに南京攻略の必要性を上申。十一月二十四日、大本営は作戰制限区域を解除し、十二月一日には南京攻略を命じます。

日本軍は十二月四日南京市郊外まで進軍、南京城を包囲した九日には飛行機で南京城内にビラ（和平開城勧告文）を撒き、降伏勧告を行いました。が、回答期限（十日午後一時）を過ぎても反応がないため総攻撃を開始、十三日南京城内へ入城、十七日には陸海軍による入城式が挙行され、中支那方面軍司令部が南京に移動しています。

## ②軍規を重視し徹底した南京攻略

中支那方面軍司令官兼上海派遣軍司令官・松井石根大將は、南京攻城に際して、これから敵の首都に入る、世界中が注目している攻城であるから、後ろ指をさされるような行為は厳禁で軍律を守るよう訓令するとともに、国府軍に対しては、降参してオーブン・シテイ（非武装宣言をし、国際法によって都市を敵攻撃から守ること）↓この行為は、第二次世界大戦でドイツがフランスの首都パリを陥落させたとき、再びフランスがドイツからパリを奪還したとき実施されている）をするように事前勧告しています。

## ③東京裁判の法廷で主張された内容

- (1) 南京落城直後の数日で非戦闘員の支那人が少なくとも一万二千人が殺害された、
- (2) 占領後一カ月の間に約二万件の強姦事件が発生した、
- (3) 占領後六週間にわたって略奪・放火が続けられ、市内の三分の一が破壊された、
- (4) 降伏した支那兵捕虜三万人以上が殺害された、

(5) 占領後六週間で殺された一般人・捕虜の総数は二十万〜三十万人にのぼる等々でした。

なお、松井石根大將は、昭和二十（一九四五）年十月九日A級戦犯容疑者として逮捕状が出され、裁判で絞首刑になっています。

## ④大虐殺が存在しない理由——白髪三千丈の巨大法螺

国民政府の首都南京において、一カ月で二十万〜三十万人の虐殺行為があれば、国際社会で大問題になるべきことが、なぜ問題になっていないのか？ 大虐殺が存在しなかったことは、次のような事実が証明しています。

(1) 当時、南京をはじめ上海・香港・北平等々の都市にはロイター、AP、UPIといった大通信社や新聞社の特派員、大使・公使・領事館員の駐在、一般の外国居留民が多数生活をしていたにもかかわらず、「南京の暴虐」ということは話題となっていない。

(2) 国民政府の常套手段は、都合が悪いことでも巧みな情報戦で国際連盟へ提訴するのだが、虐殺については国際社会へ知らしめる行為をしなかった国民政府の態度は、明らかに事実がなかったことを証明しています。

(3) 徹底的に報道管制があったからという意見もありますが、日本軍の南京入場には、百名以上ともいわれた内外の記者・カメラマンらも同行しています。

(4) 大量虐殺は誰が命じ、どのようにして短日時に実行できたのか、次の事柄と比較しても不可能です。

昭和二十（一九四五）年三月十日の東京大空襲では、三百機のB29が一六六五トンの油脂焼夷弾を投下し、八万人強の死者、また広島・長崎の原爆では約二十万人の犠牲者が出ています。この事実と比べ、当時、安全区を管理していた国際安全委員会の調査資料によれば、南京陥落直後の非戦闘員は推定二十万人、一方この南京を準備していた国府軍は約五十万人で南京の人口は最大で二十五万人、東京裁判の検事団が言っていた数字は、南京のすべての人を殺害したと言っているに等しい数字です。数週間で二十五万

三十万人が殺害されたというのに、その直後の人口が二十五万人ということ、虐殺数字そのものが出鱈目であったことを証明しています。また、陥落の数日後には両替屋が開店、三週間後には電気・水道も回復しています。

### ⑤支那兵による集団的不法行為

南京のジョン・アリソン米国大使館三等書記官より漢口のネルソン・ジョンソン米国大使に送付された書翰に同封されたジェームス・エスピー副領事の報告には、『ここで一言申しあげておくべきことは、支那兵自身は日本軍入城前に掠奪をしなかったわけではないということです。最後の数日間には疑いもなく、支那兵によって人間や財産に対して暴行がなされました。支那兵が大慌てで軍服を脱ぎ、平服に着替える最中には種々の事件が起き、その中には着物を奪うための殺人も見聞しています。このような無秩序な時において、退却する軍人や一般人が計画的ではないにせよ、掠奪を働いたのは明らかです』とあります。

この報告書は、退却する支那軍が掠奪や殺戮を行ったことを述べており、かつ支那兵が軍服を脱ぎ武器を隠して一般人に変装した便衣兵となり、「安全区」へ潜伏したことを物語っています。東京裁判では、この報告書の支那軍に不都合な部分が抹消かつ歪曲されて引用されたことです（中村繁著『大東亜戦争への道』より。現代文に改めてあります）。

### ⑥南京大虐殺が国際的に情宣されたのはいつか

大東亜戦争敗戦後、東京裁判で松井石根大将ほか陸軍将校三名が起訴された折に、南京攻略が終了した直後の昭和十二（一九三七）年十二月十三日から約六週間の間に日本軍が多数の支那人・捕虜を虐殺した、という証言がなされました。支那のプロパガンダによる報道はあったものの、当時、大虐殺が真実ではないことを熟知していた列強をはじめとする各国の大使・公使・領事、ジャーナリスト等の間で話題になることはありませんでした。国際的な話題となったのは、東京裁判での支那のプロパガンダが後に

亡霊のごとく蘇り、それらの証言というより偽証が累積し、途方もない虐殺数になったといえます。

日本人として虐殺証言を再生産したのが、国連で蒋介石政権と毛沢東政権の代表権問題が激しく論議されていた昭和四十六（一九七一）年秋、朝日新聞・本多勝一記者が同紙に連載したルポルタージュ「中国の旅」でした。これについて朝日新聞は、「中共政府承認こそが世界の潮流である」とキャンペーンを展開し、一日も早い日中国交回復を盛り上げている時期でした。

「中国の旅」は、支那人自らの嗜虐性を日本軍にかこつけて伝えており、社会の木鐸を叫ぶ記者が極めて政治性の強い中共に迎合したものでした。その一例は姜根福（当時九歳の男子）の証言で、『逮捕した青年たちの両手足首を針金で一つにしばり、高圧線の電線にコウモリのように何人もぶら下げた。電気は停電している。こうしておいて下で火をたき、火あぶりにして殺した』というものでした。日本人には考えられない嗜虐的な行為ですが、中国ではごく当たり前のことでした。

中華思想の大虐殺史は古代から現代まで引き継がれ実行されています。中共が「南京大虐殺」を声高らかに叫ぶことで「天安門事件」を抹消し、かつ国内の不平不満を反日教育によってそらそうとするのも、これまた中華思想の「指桑罵槐（桑の木を指して全く異なる槐の木を罵ること、本当の怒りの対象とは全く異なったものを攻撃する）」で、情宣活動に長じた民族であること知るべきです。



## 「百人斬り競争」を肯定し続ける朝日新聞

『南京「百人斬り競争」虚構の証明』著者 溝口郁夫

はじめに

「百人斬り競争」のモデルとされた向井敏明・野田毅両少尉に対する名誉棄損に関する訴状が、平成十五年四月二十八日に突如東京地裁に提出された。被告は本多勝一（元朝日新聞社員）、朝日新聞社、毎日新聞社、柏書房の四者であった。昭和四十七年以降、百人斬り競争に関して本多氏、朝日新聞社（以後、朝日）がどのような宣伝工作を行ない、先の裁判でどのような非常識な主張を行ったかを概説する。

### 無駄に過ぎた地裁の第一審

原告は四者を相手としたため支那事変、南京裁判資料などを含め幅広く書面を提出さざるを得なかった。

一方、被告は、百人斬りと直接関係しない藤原彰『新版南京大虐殺』など南京虐殺肯定派の著書を持ち出し、日本軍の悪行の代表が両少尉であったと、一点集中作戦をとろうとした。裁判の争点は曖昧となり時間だけが無駄に経過していった。そもそも、「百人斬り競争」（両少尉が無錫から南京入城までに百人斬りを争う）は、戦意高揚を目的に、当時の東京日日新聞社（現毎日新聞社）の浅海記者らが四回に亘って報道した武勇伝であった（本書33p、拙書『南京「百人斬り競争」虚構の証明』参照）。

毎日新聞社は平成元年になって、「…戦後は南京大虐殺を象徴するものとして非難された。ところがこの記事の百人斬りは事実無根だった。」と戦前の記事を否定していた。この様なことから毎日新聞社および、出版、表現の自由の見地から柏書房を被告とし戦線を広げる必要はなかった。名誉棄損の張本人である本多氏に対する本格的追及は、地裁判決（平成十七年八月）の後の高裁からであった。裁判開始から二年数ヶ月が過ぎていた。

### 『中国の旅』の記述を否定した新証言

本多氏は、両少尉は「殺人競争」を行った、それは「捕虜据えもの斬り」であった、と長年言い続けた。これが名誉棄損に当たるとされたのである。昭和四十七年の本多氏の著『中国の旅』に「殺人競争」が登場する。野田少尉の母校の小学校での話しを聞いた志々目彰氏の回想が紹介されている。

「…実際に突撃して行って白兵戦の中で斬ったのは四、五人しかない。…占領した敵の塹壕にむかって『ニーライライ』とよびかけるとシナ兵はバカだから、ぞろぞろと出てこちらへやってくる。それを並ばせておいて片っぱしから斬る。…本当はこうして斬ったものが殆んどだ」

本多氏は、白兵戦を、捕虜の兵士を並ばせた「据えもの斬り」であったと捻じ曲げて行くのである。

ところで、裁判が始まると朝日は社を挙げて国内外の調査網を駆使した。その一つが志々目氏以外の同級生を探し出すことであった。筆者も同様に懸命に探していた。裁判開始一年後の平成十六年四月二十二日に、筆者の高校の先輩である野上堅一郎氏に会うことが出来た。朝日の記者も野上氏に目をつけ、東京に会う約束をしていたが筆者の方が数日早かった。

野上氏は地裁提出書面で志々目氏の回想を次の様に否定した

①小学校六年生の時、野田毅少尉の話を聞いたことを覚えていません。その頃は小学生ですから、野田さんのことを百人斬りの将校さんなんだと信じていました。実際には、百人斬ったという話はされませんでしたし、捕虜を斬ったという話は聞いていません。②志々目君が『ニーライライ』とよびかけるとシナ兵はバカだから、ぞろぞろと出てこちらへやってくる。それを並ばせておいて片っぱしから斬る」と聞いたといっているらしいですが、そういう話はありませんでした。



## 本多氏の捏造「捕虜据えもの斬り」

前述の志々目氏の話には、「捕虜据えもの斬り」という言葉は出てこない。本多氏は、昭和五十二年発行の『ペンの陰謀』に、撫順捕虜収容所で思想教育をうけた鶴野晋太郎氏を登場させ、本多氏は次のように記した。

「鶴野晋太郎氏の文は、みずから日本刀で多数の中国人の首を斬り殺した体験者による稀有の告白であり、自己告発である。これによつて、日本刀の『百人斬り』とは、実は『据え物百人斬り』だったことがわかると同時に、こんなことは日本軍将校のアツタリマエの行動であり、当時の将校の中には無数の野田や向井がいたことも理解されよう。・・・」

情報将校として昭和十七年に大陸に渡つた鶴野氏は、「三年五ヶ月間の殺人は総て「据え物斬り」（逮捕拷問した正規兵遊撃隊員及び愛国者を並べておいて軍刀で斬首すること）である。一度として戦場での白兵戦闘による日本刀使用の経験はない。・・・」と書いている。そもそも情報将校が斬首の実行（約四十人）など軍隊の常識ではありえない。志々目氏のいう「並べておいて片っぱしから斬る」を意識して書いたのであろう。その後も、「据え物斬り」は、鶴野氏の『菊と日本刀』（昭和六十年）、『南京虐殺否定論13のウソ』（平成十一年）などでも書き続けられた。

## 「農民斬り」であつたと朝日は言い募る

裁判用資料を血眼になつて探し廻つた朝日は、靖国神社の『偕行文庫』の片隅に眠つていた望月三五郎著『私の支那事変』（昭和六十年）を見付け、その中の「農民斬り」の章を地裁に提出した。裁判官はこの「農民斬り」は「捕虜据えもの斬り」を証明する「事実の適示」に当たるとした。望月氏は前掲書の中で、「古本屋をあさりやつと数冊を入手した」と八冊の著書を紹介しているが、これらは『昭和戦争文学全集2中国への進撃』（昭和三十九年）にすべて掲載されていた。このように同書には二〇〇項目以上の間違

いや改竄がある。記述の一部を紹介する。

「このあたりから野田、向井両少尉の百人斬りが始るのである。野田少尉は見習士官として第十一中隊に赴任し我々の教官であつた。・・・この人が百人斬りの勇士とさわがれ、内地の新聞、ラジオニュースで賞賛され一躍有名になつた人である。『おい望月あそこにいる支那人をつれてこい』命令のままに支那人をひっぱつて来た。助けてくれと哀願するが、やがてあきらめて前に座る。・・・一刀のもとに首がとんで胴体が、がっくりと前に倒れる。首からふき出した血の勢で小石がころころと動いている。」

「小石がころころ」など空想に過ぎない。そもそも野田少尉は大隊の副官であり第十一中隊に赴任したことはないし、望月氏は未だ誰も知る筈もない「百人斬り」と決めつけているが、野田少尉自身が「百人斬り」を知つたのは翌年の新聞であつた。

## 「二五三人」「三七四人」斬りなどの証提提出

本多氏らは、一〇〇人以上の競争をしたと書いた新聞記事も地裁に提出した。

▽「二五三人斬り」／大阪毎日新聞（昭和13年1月25日）、  
▽「三七四人斬り」／鹿児島新聞（同年3月21日）、鹿児島朝日新聞（同年3月22日）

両少尉の所属する京都第十六師団は、南京陥落の翌年一月には南京東方に移駐したため、これらの記事の虚偽は明らかなのであるが、裁判官は「事実の適示」扱ひとした。

本多氏の『中国の旅』の中で百人斬り競争のことを説明した姜根福氏は、この本のわずか四ヶ月後に発行された『人民中国』で次のようなこともいつている。

「・・・さきに百人殺したものを『勝者』にするというのだ。目標は一人あたり百人殺すのだが、上級の命令を受けて、この二人の殺人鬼は、三回にわたつて四十五キロにわたりわが同胞六百余人を殺害した。・・・」（洞富雄『南京大虐殺「まぼろし」化工作批判』）

南京虐殺肯定派の著書のいかかわしさが分るのである。

### 実質大勝利であった高裁判決

地裁と異なり、高裁は判決（平成十八年五月）で次のような核心を突いた指摘をした。

「東京日日記事の『百人斬り競争』をその記事のとおり事実と  
いうために最も重要な項目（他に四項目）は、『戦闘中の行為である  
こと』である。したがって戦闘中の行為でない『捕虜据えもの  
斬り』の根拠として、東京日日記事を挙げるのは誤っている」。

両少尉に対する名誉棄損は認められなかったが、今後とも本多  
氏や朝日は「百人斬り競争」を肯定し続けるのであろうか。いず  
れにせよ裁判は実質的に大勝利であった。

### 浅海記者一家のその後の人生

百人斬り競争記事の執筆者の一人である鈴木二郎記者は、浅海  
記者について、「労組委員長をやめてから家族ぐるみ中国に渡った」  
『ペン』の陰謀』昭和五十二年」と記しているが、評論家の高山正  
之氏は更に次のように言っている。

「日本軍士官が百人斬りを競ったという与太を書いた。……し  
かし嘘はばれる。彼「浅海」は閑職に追われ、毎日新聞も『一億  
人の昭和史』の中で彼の記事に疑問符を付けていた。もし書いた  
本人がでつちあげを自供したら、それと関連させて支那が嘸した  
南京大虐殺もばれる。廖承志は今、手を打つべきだと考え、『金も  
仕事もやるから家族ごと北京にこないか』と浅海を誘った。彼は  
針の筵の祖国を捨て支那に移り、娘の真里も北京大に入れてもら  
った。彼女は今も政府施設に店をだし優雅に暮らしている。」（週  
刊新潮』平成二十四年八月三〇日号）。

### 支那事変に至るまでの近代の日中関係史

「自由主義史観研究会」会員 石部 勝彦

明治以来、日本外交の基本は欧米列強と対決するため近隣諸国  
と提携することだった。「アジア主義」である。岡倉天心は「アジ  
アは一つ」と言い、頭山満は「日本と支那は夫婦同然」と言っ  
た。ところが朝鮮も中国もこれに同調せず日本を敵視したため、  
日本は困難な道を歩むことになった。

日本が恐れたのは朝鮮がロシアの支配下に入ることだった。欧  
米の侵攻を火事に例えるなら、ここが炎に包まれては日本への延  
焼は防ぎ難い。火事を防ぐ手段は列強に対決し得る近代国家を建  
設することだ。そう考えた日本は自らそれを行ない、朝鮮にもそ  
れを求めたが、朝鮮は理解せず旧態依然の姿を変えなかった。

一八八四（明治十七）年、甲申事変が起こる。日本との提携を  
図った金玉均のクーデターは、清国軍が直ちに鎮圧した。金を助  
けようとした日本軍は一蹴され、金が逃げ込んだ日本公使館は焼  
き討ちされた。

一八八六（明治十九）年、長崎事件。清国北洋艦隊の定遠・鎮  
遠など四隻の軍艦が長崎に入港、威容を見せつける。水兵が上陸、  
市内で乱暴狼藉を働く。警官隊と市街戦になり双方に死傷者を出  
す。清国は高圧的、日本側が謝罪して解決した。

朝鮮は清国の支配が強化される。朝鮮が日本の希望を受容する  
にはこれが障害となった。一八九四（明治二七）年、東学党の乱。  
日清両軍が出兵。日本は朝鮮の独立を求めたが、清国は拒否。日  
本は大元君の要請に応え、朝鮮の独立を目的として清国に宣戦。  
日清戦争である。

日清戦争の敗北は清国に反省を促す。近代化に失敗した清国が  
成功した日本に敗れたのだ。日本に学ぼうとする機運が生まれる。  
多くの留学生が来日する。

一八九八（明治三一）年、若き光緒帝は康有為ら若手官僚とともに明治維新を手本とする改革を志す。しかし、袁世凱の密告によりこの改革は潰えた（戊戌政変）。光緒帝は幽閉され、康有為は日本へ亡命する。

一九〇一（明治三四）年、義和団事件が鎮圧される。各国の軍隊は担当地域で略奪の限りを尽くしたが、日本軍の担当地域だけは軍紀が厳正だったので避難民が殺到した。なお、日本軍はドイツ軍による紫禁城砲撃をやめさせ、無血開城させてその美しい城と宝物を守った。アジア主義者の公爵近衛篤磨は清朝皇族に礼を尽くし彼らの信頼を得た。

一九〇二（明治三五）年、西太後の新政が始まる。復帰した西太後の下で新たな近代化の動きが起こる。人材養成、産業振興、軍備整備、法律改正等が掲げられ、日本に学ぶべきことが強調された。大量の使節団が日本に送られ、日本側もそれに誠意をもつて応えた。留学生も増大した。

一九〇五（明治三八）年科挙が廃止され、日本への留学がそれに替わる資格とされた。この年の日露戦争の勝利は清国人留学生をも熱狂させた。両国のよい関係の続いた時期もあつたのである。

一九一〇（明治四四）年の辛亥革命。孫文を助けた人々だけではなく、この革命に共鳴して参加した日本人も多数存在した。

一九一二（明治四五）年、中華民国の成立。臨時大總統となつた孫文の政権には、多くの日本人が顧問として参加し彼を助けた。やがて孫文に替わって臨時大總統になつた袁世凱にも、坂西利八郎という軍人が早くから顧問として彼を助けていた。北洋陸軍は坂西が創つたものである。

一九一五（大正四）年、日本軍の青島ドイツ軍攻略に際して、袁世凱は反日的な態度を顕わにする。やむなく日本政府は所謂「二

一カ条要求」を提出した。これは日中間の懸案を一挙に解決しようとするものでもあつた。この要求は正當なものであつたが、袁世凱は嘘を交えて内外に発表し、また最後通牒を出して欲しいという罫を仕掛けて、声高に日本非難を始めた。これがその後の日中対立・関係悪化の出発点となつた。なお山東のドイツ権益は、日本が引継いだ上で中華民国に引渡すことを約束した。

一九一六（大正五）年の袁世凱の死後、中華民国は分裂状態となつた。広東には孫文の軍政府が生まれ、北支では袁世凱の部下達がそれぞれ軍閥の長となり、権力の座を争う事態となつた。結局その一人である段祺瑞が國務総理という事実上の首相の地位についた。寺内正毅首相は段祺瑞が安定政権を確立することを強く望み、彼に大きな資金援助をすることになつた。西原亀三を介したので「西原借款」と呼ばれ、数回にわたり総額一億四五〇〇万円（現在の百兆円）を提供した（※注1）。これと引き換えに結ばれたものが一九一八（大正七）年の「山東省に於ける諸問題処理に関する交換公文」であり、これによって山東のドイツ権益は最終的に日本が引継ぐことを中華民国も「欣然として」了承した。

一九一九（大正八）年、パリ講和会議。中華民国は一九一七年に段祺瑞政府がドイツに宣戦したことを理由に戦勝国として参加。中華民国の主張は山東のドイツ権益が直接自国に返還されること。アメリカもそれを支持したが、一九一八年の「交換公文」を見せられては日本の主張を認めざるを得なかつた。ベルサイユ条約は日本の主張通りとなつたが、中華民国代表は調印を拒否。この知らせが届くと、北京の学生を中心に「二一カ条要求」拒否の「五四運動」が繰り広げられることとなつた。山東のドイツ権益だけではなく、日露戦争の結果である満洲権益の返還をも要求するようになる。その背景には、この年七月に出された「カラハン宣言」の影響があつた。ソ連の外務委員カラハンが旧ロシアの奪つた権益を全て返還すると宣言したのである（翌年、嘘と判明したが）。ソ連がそうするなら日本も、となつたのだ。共産党の影響力も強

まった。

一九二二（大正十一）年、ワシントン会議。中華民国代表は、山東のドイツ権益と満洲のロシア権益の返還を執拗に要求。幣原喜重郎代表は、山東に関しては大局的な立場から譲歩しこれを受諾したのだった。

一九二〇年代に入ってからからの北京では、安直戦争（二〇年）、第一次奉直戦争（二二年）、第二次奉直戦争（二四年）と北支および満洲の軍閥による戦争が絶え間なく続き、権力を握る人間も次々に入れ替わった。最後の勝利者は奉天軍閥の張作霖だった。段祺瑞は失脚し「西原借款」も消滅した。

一方広東軍政府の孫文は北京の軍閥政権に対抗し、武力による統一を目指していた。二一年、孫文はコミンテルンのマーリンと接触してソ連と提携する方向に動き、二四年国共合作を実現させる。孫文の死後後継者を巡る争いが起こるが、二六年、蒋介石が国民党軍のトップの地位についた。直ちに武力による統一、北伐を開始する。

一九二七（昭和二）年三月、南京事件。北伐軍が南京に入った時、兵士達が外国人居留地を襲撃して略奪の限りを尽くす。日本は無抵抗を貫き、死者はなかったが大使館に避難した日本人は略奪を恣にされた。同年四月、漢口事件。漢口の日本租界を共産系組織が指導する民衆が襲い、海軍陸戦隊が出勤して居留民を救出した。同年五月、第一次山東出兵。北伐軍が山東に迫ると、日本政府は居留民保護のため二千の兵士を青島に派遣。北伐軍が敗れて撤退したので、日本軍も撤兵した。

一九二八（昭和三）年五月、濟南事件。四月に北伐が再開、濟南居留民の要請により日本軍が再度出兵（第二次山東出兵）、防備を固める。蒋介石から安全保証の通知があったため防備を解くと北伐軍が襲撃、略奪暴行を行なった。日本軍が出兵して退散させたが後の祭りだった。二十数名の虐殺された遺体が残されていた。

同年六月、張作霖爆殺事件。北京の支配者張作霖は満洲に戻ることになった。奉天に着く直前、列車が爆破されて重傷を負い自宅で死亡。閔東軍の河本大作によるものとされてきたが、近年、コミンテルン説、張学良説が唱えられている。同年十二月、張学良の易幟。父を継いで満洲の支配者となった張学良は日本との友好関係を断ち、青天白日旗を掲げて蒋介石の国民党政権への恭順を表明した。共産勢力の活動も活発化した。

一九三一（昭和六）年九月の満洲事変の勃発、翌年三月の満洲国の誕生。満洲事変は日本の権益を張学良が実力で奪おうとしたことから起こった。反日勢力の暴力行為も酷いものだった。日本政府の交渉では何の効果も生まなかった。実情を知る閔東軍が動いたのである。張学良軍は二十万、閔東軍は一万五千。それでなぜ成功したのか。その理由と意味を考えなければならぬ。満洲に住む圧倒的多数の民衆の支持があったからである。張学良の民衆に対する苛斂誅求も凄まじいものであった。

張学良軍が逃げ出すと、満洲各地の民衆は熱狂し、それぞれ指導者を立てて独立を宣言した。その一人に張景惠がいる。彼は後に満洲国の國務総理になったが、こういう人々が集まって満洲国を創ったのである。

閔東軍はそのお膳立てをし、背後から支える役割を果たした。やがて清朝最後の皇帝溥儀を迎える。

こうして五族協和を掲げる理想国家が誕生したのであった。

※注1 黄文雄著「中国人の八割は愚か」P.28



パネル・冊子執筆者リスト

- 石原隆夫・「新しい歴史教科書をつくる会」東京支部／P2・P14・P38・P42・P44・構成・編集
- 三輪武司・「新しい歴史教科書をつくる会」神奈川支部／P3・P4・P35・P36・P43
- 茂木弘道・「史実を世界に発信する会」事務局長／P5・P10・P17・P18・P19
- 小林大巖・「新しい歴史教科書をつくる会」神奈川支部／P6・P15・P20・P21・P22・P24
- 石部勝彦・「自由主義史観研究会」会員／P7・P8・P9・P11・P12・P13
- 溝口郁夫・『南京「百人斬り競争」虚構の証明』著者／P16・P30・P31・P32・P33・P34・P37・P40
- 尾形美明・「新しい歴史教科書をつくる会」埼玉支部／P23・P25・P26・P27・P28・P29・P41
- 荒木田修・弁護士・「新しい歴史教科書をつくる会」東京支部／P39
- 加藤浩康・ビジネス研究所／P48
- 監修・藤岡信勝・「新しい歴史教科書をつくる会」前会長



南京占領後の日本軍兵士と南京市民のこの穏やかな交流の風景は、「南京虐殺」が虚構であった事を証明するのではないのか



南京戦はあったが「南京虐殺」はなかった 定価 500 円

## 企画：南京の真実国民運動

構成・制作：「新しい歴史教科書をつくる会」パネル展実行委員会

〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3-203「新しい歴史教科書をつくる会」

TEL：03-6912-0047 FAX：03-6912-0048 <http://www.tsukurukai.com>